

平成22年度

市原市内遺跡発掘調査報告

こおりもと
郡本遺跡群 第14次
あま くぼばた
海士遺跡群 久保畑地区
さんしん
山新遺跡 第6地点・第7地点
きくま みやこし
菊間遺跡群 宮ノ腰地区
しらふねじょうあと
白船城跡 第8次
いちほらじょうあと つじ
市原城跡 辻地区

2011

市原市教育委員会

序 文

千葉県市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれています。そのため、有史以来多くの人々が、この地で郷土の歴史を育んできました。縄文時代の大貝塚群をはじめ、「王賜」銘鉄剣や史跡上総国分寺跡、西願寺阿弥陀堂など、市域はこれら先人の足跡を今に伝える貴重な文化遺産の宝庫です。

本市は、昭和30年代後半から石油化学を中心とする企業が湾岸の埋立地へ進出してきたことにより、それまで農業・漁業を中心としてきた社会経済構造が大きく変化し、人口の増加と都市化が急速に進展しました。このような中、先人達の残した文化財を保護・保存するために、各種の調査を実施しています。

本報告書は、平成22年度に国及び県の補助を受けて実施した、個人住宅の造成等に伴う遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願います。

最後に、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご指導並びにご協力いただきました文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心より御礼申し上げます。

平成23年3月

市原市教育委員会
教育長 山崎正夫

例 言

- 1 本書は、国庫および県費の補助を受けて、市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会生涯学習部の埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 本報告書所収の調査は下記の通り（調査順）であり、所在地などの諸情報は巻末の報告書抄録に記載した。
 - (1) 郡本遺跡群第14次（調査コード セ459） 確認調査23.7㎡／237.43㎡・本調査112㎡
調査期間：平成22年2月8日～2月26日 調査担当：木對和紀
 - (2) 海士遺跡群久保畑地区（調査コード セ460） 確認調査23㎡／225.54㎡・本調査32㎡
調査期間：平成22年4月19日～5月13日 調査担当：牧野光隆
 - (3) 山新遺跡第6地点（調査コード セ464） 確認調査14.8㎡／148.04㎡・本調査2㎡
調査期間：平成22年8月23日～8月25日 調査担当：木對和紀
 - (4) 菊間遺跡群宮ノ腰地区（調査コード セ467） 確認調査25.7㎡／257.63㎡・本調査7㎡
調査期間：平成22年9月22日～9月30日 調査担当：田所 真・田中清美
 - (5) 山新遺跡第7地点（調査コード セ465） 確認調査27㎡／264㎡・本調査3㎡
調査期間：平成22年10月6日～10月8日 調査担当：牧野光隆
 - (6) 白船城跡第8次（調査コード セ466） 確認調査54㎡／536.37㎡
調査期間：平成22年10月12日～10月15日 調査担当：牧野光隆
 - (7) 市原城跡辻地区（調査コード セ470） 確認調査17㎡／165㎡
調査期間：平成22年11月8日～11月15日 調査担当：田中清美・田所 真
- 4 本書の編集・執筆は、「2 郡本遺跡群 第14次」・「6 菊間遺跡群宮ノ腰地区」を田所真が、「8 市原城跡辻地区」を田中清美が、その他を牧野光隆が担当した。
- 5 海士遺跡群・菊間遺跡群・山新遺跡第7地点の貝類の分析及び分析原稿執筆は忍澤成視が行った。
- 6 調査に際しては、市原城跡以外の他調査地点においては基準点測量を実施していない。そのため、図中に示す座標値（平面直角座標第Ⅸ系・日本測地系）及び北方位は地形図等から求めたものであり、厳密なものではない。また、各遺跡全体図中に1点のみ世界測地系変換座標（TKY2JGD ver.1.3.79による）を記した。水準については、近隣の既知点より求めて使用した。

本文目次

1 調査遺跡の位置……………	1	6 菊間遺跡群 宮ノ腰地区……………	21
2 郡本遺跡群 第14次……………	2	7 白船城跡 第8次……………	23
3 海士遺跡群 久保畑地区……………	8	8 市原城跡 辻地区……………	26
4 山新遺跡 第6地点……………	16	9 出土遺物観察表……………	31
5 山新遺跡 第7地点……………	18		

挿図目次

第1図	調査遺跡位置図	1
第2図	郡本遺跡群第14次周辺地形図	2
第3図	郡本遺跡群第14次全体図、トレンチ配置図・実測図、周辺地籍図	4
第4図	郡本遺跡群第14次出土遺物	5
第5図	海士遺跡群久保畑地区周辺地形図	8
第6図	海士遺跡群久保畑地区全体図、1トレンチ実測図・出土遺物	9
第7図	本調査範囲SI01・SI02・SP01～04実測図	10
第8図	SI01・SI02遺物分布図、SI01出土遺物(1)	11
第9図	SI01出土遺物(2)、SI02出土遺物	12
第10図	SP01出土遺物、3・4トレンチ出土遺物	13
第11図	海士遺跡群久保畑地区貝種組成グラフ・殻高計測グラフ	15
第12図	山新遺跡第6・第7地点周辺地形図	16
第13図	山新遺跡第6地点全体図、1トレンチ実測図・出土遺物	17
第14図	山新遺跡第7地点全体図、3トレンチ実測図	18
第15図	1・2トレンチ実測図、1トレンチ出土遺物	19
第16図	菊間遺跡群宮ノ腰地区周辺地形図	21
第17図	菊間遺跡群宮ノ腰地区全体図、土層断面図	22
第18図	白船城跡周辺地形図	23
第19図	白船城跡第8次全体図、1・2トレンチ実測図・出土遺物	24
第20図	3・4トレンチ実測図、3トレンチ出土遺物	25
第21図	市原城跡辻地区周辺地形図	26
第22図	市原城跡辻地区全体図、1・2トレンチ実測図	27
第23図	2トレンチ出土遺物(1)	28
第24図	2トレンチ出土遺物(2)	29

表目次

表1	海士遺跡群久保畑地区 貝層サンプル基礎データ・内容物組成	15
表2	海士遺跡群久保畑地区 貝類データ・層位別個体数	15
表3	山新遺跡第7地点 貝層サンプル基礎データ・内容物組成	20
表4	山新遺跡第7地点 貝類データ	20
表5	菊間遺跡群宮ノ腰地区 貝層サンプル基礎データ・内容物組成	22
表6	菊間遺跡群 貝類データ	22

図版目次

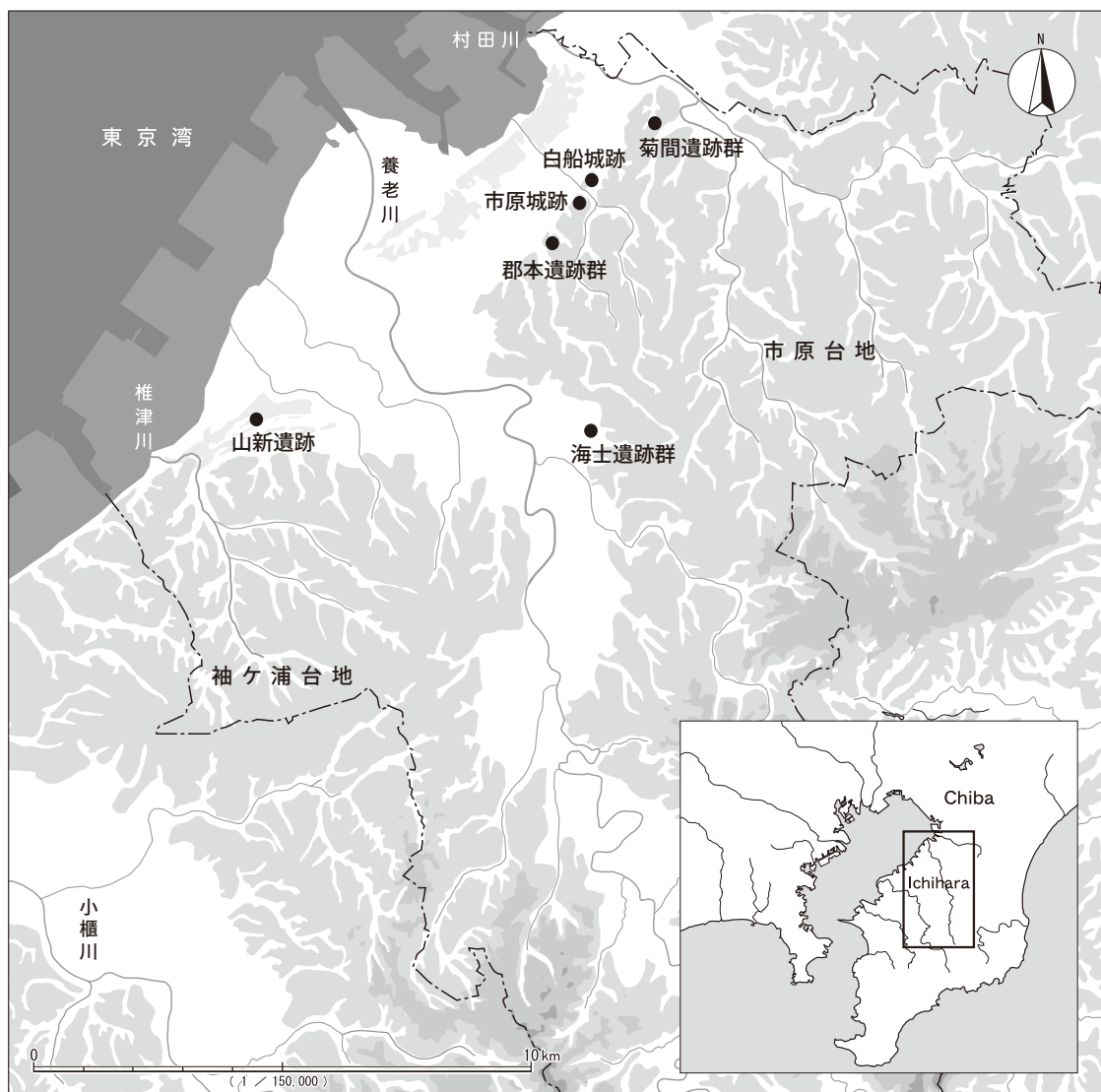
図版1	郡本遺跡群第14次
図版2	海士遺跡群久保畑地区
図版3	山新遺跡第6・第7地点
図版4	山新遺跡第7地点・菊間遺跡群宮ノ腰地区
図版5	白船城跡第8次・市原城跡辻地区
図版6	市原城跡辻地区、郡本遺跡群・海士遺跡群出土遺物
図版7	海士遺跡群・山新遺跡第6・第7地点・白船城跡出土遺物
図版8	郡本遺跡群・海士遺跡群出土遺物
図版9	海士遺跡群出土遺物・海士遺跡群出土貝類
図版10	海士遺跡群出土貝類・魚類、山新遺跡第6・第7地点・菊間遺跡群・白船城跡・市原城跡出土遺物
図版11	市原城跡出土遺物

1 調査遺跡の位置

平成22年度は、海士遺跡群・山新遺跡（第6・第7地点）・菊間遺跡群・白船城跡・市原城跡の5遺跡6地点の発掘調査を実施した。また、郡本遺跡群第14次調査は、調査期間が昨年度終盤であったため、今年度の整理報告に加え、6遺跡7地点の整理報告とした。

市原市は、南北に約35kmと縦長の行政区画を有し、養老川が南北を縦貫する。その養老川下流域が開析した台地の右岸を市原台地、左岸を袖ヶ浦台地と通称する。東京湾岸の埋立地は、京葉臨海工業地帯の一角を担い、流通網の大動脈である国道16号線が走る。やや内陸に入った旧海岸線沿いの砂堆上にJR内房線が敷設され、北から八幡宿・五井・姉ヶ崎の3駅を擁する。そのような環境から、市内北部域の市街化区域には人口が集中し、都市化が進んできた。

今年度報告する7地点は、いずれも個人の住宅等建設に伴う調査であり、養老川右岸の海もしくは川をのぞむ市原台地端部に位置する遺跡群と、姉ヶ崎の砂堆上の山新遺跡である。郡本・海士・菊間は埋蔵文化財の密度が高い地域であり、郡本と市原城跡は国府推定地としても知られたエリアである。



第1図 調査遺跡位置図

2 郡本遺跡群 第14次 (遺構：図版1 / 出土遺物：図版6・8)

遺跡の位置と周辺の調査状況 郡本遺跡群は、東京湾の海岸線より南東に約2.5km入った市原台地上に所在している。標高は、25m前後である。遺跡の広がり、南北1.35km、東西0.83kmという広大な台地平坦面全域に及んでいることから、「郡本遺跡群」と呼称している。

本遺跡は、郡本交差点の北約100m強を谷頭部とする浅い谷が十時の方角から入り込んできており、これによって北東部と南西部とに二分されている。このうちの特に北東部にあたる旧小字古甲地区を中心として、これまでに上総国府推定地として7回の学術調査等が実施されており、大型掘立柱建物跡や古代にさかのぼる大溝の存在などが確認されている。一方、南西地区についても、郡本八幡神社北側の東西道路(五井本納線)を中心に、今回の調査以前に、本埋蔵文化財調査センターでも10地点で発掘調査を実施している。(他に、千葉県文化財センターによる発掘調査などが行われている。)

以上の経緯の中で、郡本八幡神社本殿のほぼ西側90mの地点について、郡本遺跡第14次調査として実施したものが、本報告の内容である。現在の住居表示では、郡本一丁目に含まれているが、旧字名では大字郡本字宮ノ前にあたっている。

尚、本調査地点は、昨年度報告をおこなった郡本遺跡群(第13次)調査と西側で隣接しており、第13次調査で確認した大溝の延長線上にあたっていることが、調査開始以前から推測されていた。



第2図 郡本遺跡群第14次周辺地形図

近隣の調査事例としては、郡本遺跡群（第5次）がある。

調査概要 調査は個人住宅建設に先立って実施された確認調査ならびに一部本調査である。

確認調査は、4か所のトレンチ（第3図左列上段）によって実施している。このうちの北西隅のトレンチについては、浄化槽設置予定部分であることから、その形状に合わせて東西方向の調査区を設定したが、他の3か所については、第13次調査で確認されていた大溝に直行するようにトレンチを配置した。

確認調査の結果、浄化槽設置予定部分（NO.1トレンチ）では、遺構の存在が確認できなかったが、他の3か所の確認調査区（NO.2～NO.4トレンチ）では、母屋建設予定部分にかかるように大溝の存在等が明らかとなった。この大溝は、第13次調査で確認していた大溝の延長線上にあっている。このことから、断面形状ならびに堆積状況についても、No.3トレンチの一部掘り下げ調査によって確認した（第3図右列中段）。

尚、断面形状の確認作業を行うに当たって、安全性確保の観点から周辺部の表土層の除去を実施したところ、西側隣接部に平安時代中期の竪穴式住居跡（SI01）と、これに伴う竈遺構の存在を確認している。（第3図左列中段）

本調査は、母屋建設部分を対象に実施している。（第3図右列上段）調査面積は、112㎡である。

本調査の結果として、北側にテラス状の平坦面を有する大溝（中世）1条（SD01）ならびに溝（弥生時代）1条（SD02）の一部記録保存を実施している。尚、本調査区東側の土層断面観察結果から見ると、中世期の大溝（SD01）埋没後は、集落など生活空間としての利用が停止していたようであり、概ね、耕作等に伴う並行堆積層で被覆されていた（第3図右列中段土層図Ⅱ～Ⅳ層）。昭和36年頃撮影された当該地区の空中写真においても、調査区は畑地として利用されている。

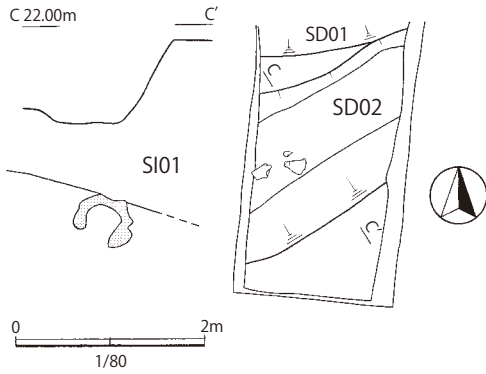
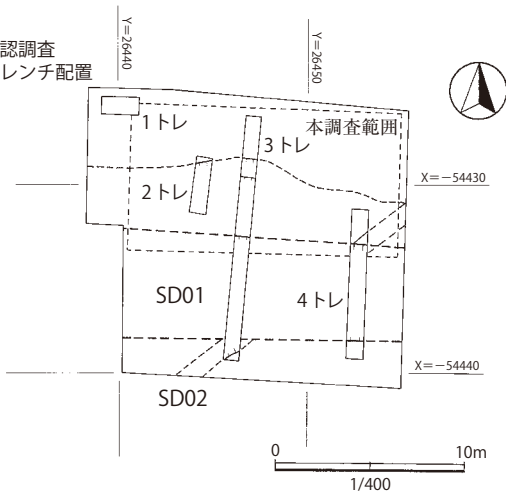
遺構と遺物 NO.2トレンチからは、中世期の大溝（SD01）の北側テラス状遺構の北端部が確認された。このテラス面は、NO.3トレンチからもその延長部分が確認されている。出土土器は、大溝（SD01）覆土中の細片のみであった。NO.3トレンチからは、北側テラス状遺構を含む中世期の大溝（SD01）と弥生時代の溝（SD02）を確認した。NO.4トレンチからは、中世期の大溝（SD01）と、弥生時代の溝（SD02）を確認している。本トレンチで確認された弥生時代の溝（SD02）は、NO.3トレンチの延長線上にあたる溝と考えられた。母屋建設部分の本調査では、中世期の大溝（SD01）北側テラス部分と弥生時代の溝（SD02）の一部、さらに、小ピット数か所の調査を行った。尚、大溝（SD01）の大半は、本調査範囲の南側保存区域に含まれていた。

以下、各遺構と出土遺物について報告する。（第3・4図）

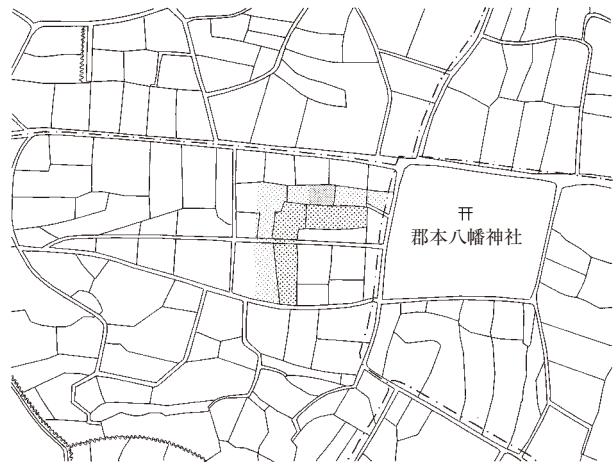
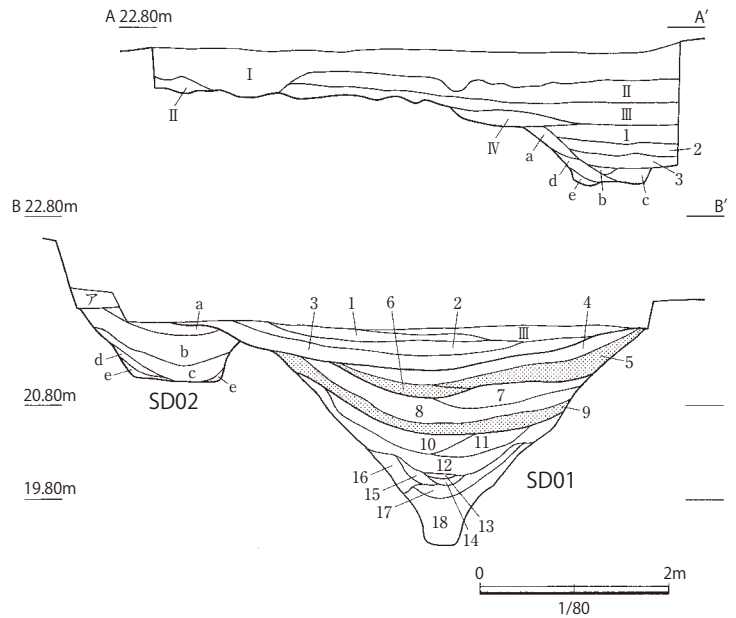
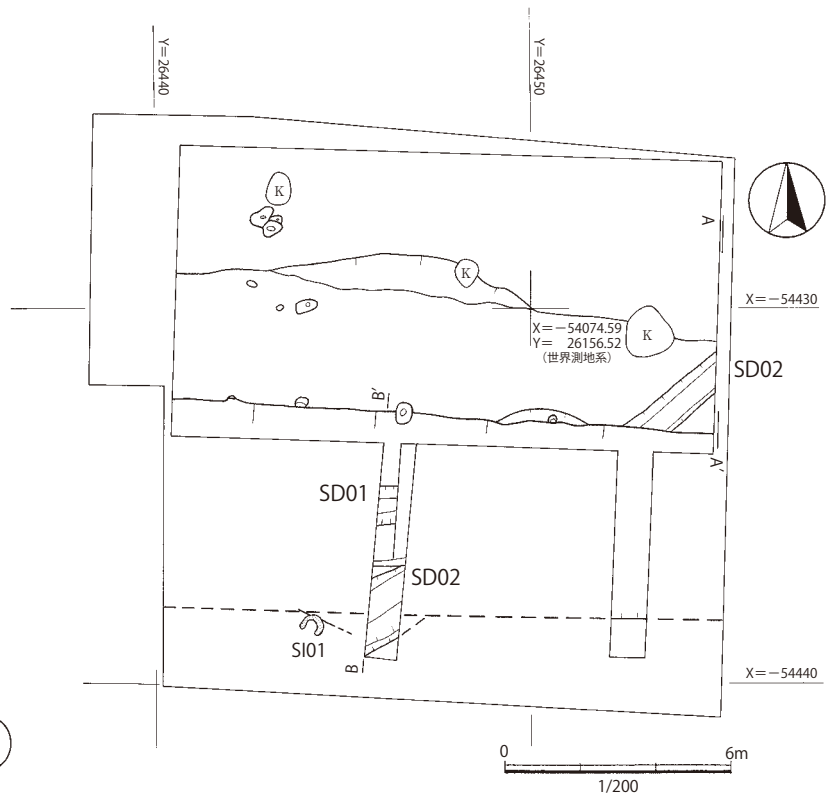
大溝（SD01）の形状ならびに規模は、次のとおりである。

- (1) 幅員は、北側テラス部分を含めた場合で、おおよそ8.5m、溝部のみでは地山の傾斜変換点を測点として5.5m程度であった。
- (2) 断面形状は、底面に幅0.32m前後の平坦面を有するV字型を呈しており、深さは遺構確認面から約2.7mを計測している。
- (3) 溝の向きは、真北に対してほぼ東西方向であった。
- (4) 確認された溝の距離は、郡本遺跡群第14次調査区内では14.4mであるが、西側隣接調査区（郡本遺跡群第13次）の確認成果を加えると、30.0m以上に渡っていることが明らかとなった。
- (5) 覆土中からの出土遺物は、常滑の甕、カワラケ、白磁、釘、鉄滓、銅銭片、土師器、須恵器、弥生式

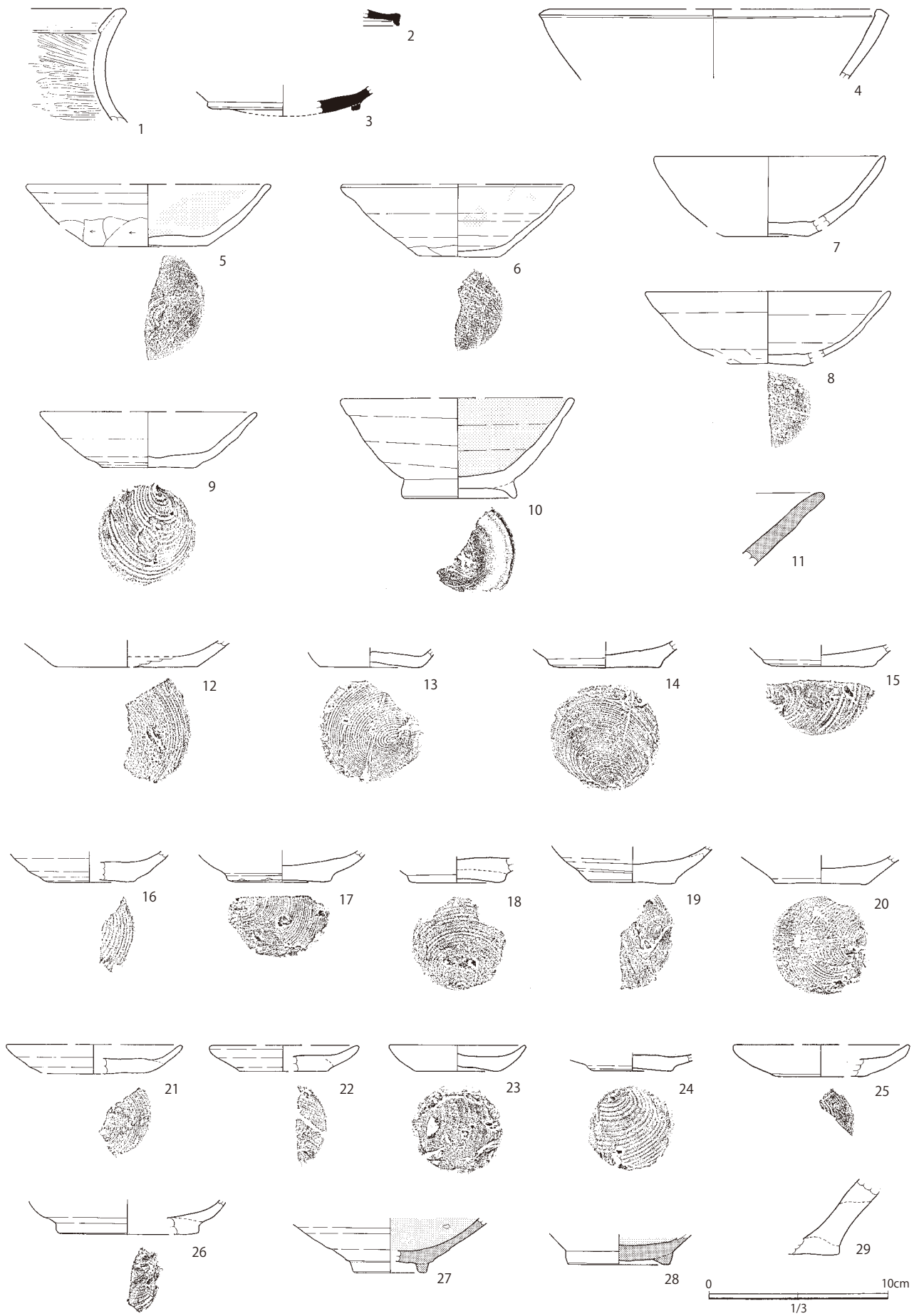
確認調査
トレンチ配置



- I 表土層
- I. 黒褐色土。耕作による攪乱層。ローム粒子を若干含んでいる。
 - II. 暗褐色土。ローム粒子を含み、締まっている。
 - III. 暗褐色土。ローム粒子を若干含む。大薄上層覆土。
 - IV. 暗褐色土。ローム粒子を若干含む。締まりがない。
- II SD01
- 1. 暗褐色土。ローム粒子少量含む。やや締まる。
 - 2. 暗褐色土。ローム粒子若干含む。締まりが弱い。
 - 3. 暗褐色土。ローム粒子若干含む。
 - 4. 暗褐色土。ローム粒子若干含む。締まっている。
 - 5. 黒褐色土。有機質土壌主体。
 - 6. 黒褐色土。有機質土壌主体。
 - 7. 暗褐色土。1cm以下のロームブロックが入る。
 - 8. ローム土層。ローム粒が多い。
 - 9. 黒褐色土。有機質土壌主体。締まっている。
 - 10. 暗褐色土。ローム粒子を多量に含む。
 - 11. 暗褐色土。ロームブロックを主体とする。
 - 12. 黒褐色土。ロームブロック若干含む。
 - 13. 明褐色土。ローム粒子1~2cmのロームブロックを主体とする。
 - 14. 黒褐色土。有機質土壌。締まりがない。
 - 15. 明褐色土。ローム粒・ロームブロック主体。
 - 16. 暗褐色土。汚れたローム粒。1cm大のロームブロックを含む。
 - 17. 黄褐色土。ローム粒主体。
 - 18. 黄褐色土。ロームブロック・ローム粒子主体。
- III SI01
- ア. 暗褐色土。隣接する平安時代（9世紀~10世紀）の堅穴住居跡覆土。
- IV SD02
- a. 暗褐色土。ローム粒子を若干含む。
 - b. 黒褐色土。有機質土壌主体。ローム粒子、ロームブロックを若干含む。
 - c. 暗褐色土。ローム粒子を若干含む。
 - d. 明褐色土。汚れたローム粒を多量に含む。
 - e. 褐色土。ローム粒子を主体とする。



第3図 郡本遺跡群第14次全体図、トレンチ配置図・実測図、周辺地籍図



第4図 郡本遺跡群第14次出土遺物

土器などであった。

- (6) 遺構の開削時期並びに使用期間は、中世と考えることができる。古代以前の遺物は、周辺からの流れ込み等によるものであろう。

溝（SD02）の形状ならびに規模は、次のとおりである。

- (1) 幅員は、第3トレンチの確認段階で約1.6m、第4トレンチの確認段階で約0.9mであった。
- (2) 断面形状は、底面に幅0.5～0.7m程度の平坦面を持つ逆台形の箱型を呈しており、少なくとも1.0m程度の深さを有していたものと考えられる。
- (3) 溝の向きは、概略、真北に対して北東方向を向いているが、第3トレンチで確認された向きと、第4トレンチで確認された向きとに違いがあり、直線的に掘られた溝ではないことが想定される。
- (4) 確認された溝の距離は、トレンチ間の遺構直線距離において、11m以上であったことが明らかとなっている。
- (5) 覆土中からは、弥生式土器が出土している。
- (6) 遺構の開削時期並びに使用期間は、覆土中の出土遺物からみて、弥生時代後期と考えることができる。

竈穴住居跡（SI01）は、第3トレンチ南端西側において、竈跡の平面プランなどが確認されている。しかし、竈の取りつく北辺部のプランから、竈穴住居のおおよその振れはつかむことができているが、遺構全体の規模については把握していない。調査では、竈周辺の埋土中の遺物を若干取り上げてきたに過ぎない。本遺構の帰属時期は、杯類において底高比が近似値を示すと共に、外面の調整技法においても体部下端ならびに底部に、轆轤台からの切り離し後の窺削り整形が共通して認められることから、平安時代中期（10世紀頃）と考えることができよう。

遺跡の性格等について 郡本字宮ノ前に初めて考古学的な発掘調査のメスが入ったのは、昭和30年代の後半であった。平野元三郎らによる確認調査である。（平野元三郎「市原市上総国府関係遺跡」『千葉県遺跡調査報告書』（1965）千葉県教育委員会）。同報告書によると、郡本宮ノ前遺跡の調査では、基壇建物の地業痕跡と、これに伴う溝が発見されたようである。また、出土遺物から、「平安鎌倉期の市原郡衙と推定」されているのである。更には、郡本八幡神社境内地の方形区画を含めて、一町四方の区画が、東西方向に三区画並んでいたものとの想定を、旧字切図から行っている。その上で、発見された基壇建物や溝の方角は、この区画の向きに規定されていると関係付けているのである。このことから、今回第13次ならびに第14次調査によって確認された大溝（SD01）と、平野らによる調査成果、即ち、基壇建物との平面的な関係が明らかにできれば、大きな成果を提示することができたのであろうが、往時の調査地点を特定することは現時点ではできなかった。今後、基壇建物との位置関係の解明に期待しなければならない。しかし、平野等が字切図から想定した「一町四方の区画」の存在については、今回の調査成果によって、新たな見解を提示することができるかと思われる。これまでの調査事例の成果を整理した上で、述べておくこととしたい。

昭和60年代より今年度までに実施している郡本遺跡群の発掘調査（第1次～第14次）のうち、宮ノ前地区ならびに周辺地区（以下、「郡本八幡神社地区」と仮称しておきたい。）での調査成果を整理してみると、18地点での調査成果から（参考『市原市郡本遺跡群（第12次）』（2010）市原市教育委員会）、ほぼ以下のような傾向を抽出することができた。

- ①郡本八幡神社地区の全域にわたって、弥生時代後期を中心とする集落が確認でき、古墳時代前期までには一旦終息する。
- ②一部において、古墳時代後期の集落が確認される。
- ③古代には、ほぼ全域で竪穴住居跡と掘立柱建物跡によって構成される遺跡が展開している。但し、この時期の掘立柱建物群は、五井本納線の北側に偏向する傾向が認められる。
- ④現在の五井本納線南側端部で、現道に並行して古代の溝が確認されている。従って、五井本納線の地割は、比較的古い段階まで遡ることが想定できる。
- ⑤古代の遺構は、8世紀初頭からで、畿内産土師器が出土している。また、その終焉は11世紀で、この時期の緑釉陶器が溝状遺構からも発見されている。
- ⑥瓦の分布は、殆ど認められない。
- ⑦11世紀後半から12世紀前半の遺物が希薄であり、この時期の継続性には検討が必要である。
- ⑧郡本八幡神社境内隣接西側一町程度の範囲に、鎌倉時代から室町時代前期に至る大規模な区画溝が、五井本納線と並行して認められる。
- ⑨中世の遺構は、この区画溝の範囲内に集中する傾向がある。字「宮ノ前」は、この範囲に含まれている。
- ⑩本遺構は12世紀前半以降に出現し、13世紀後半をピークとし、14世紀中ごろまでには、終焉したものと考えることができる。

以上の整理の中で、特に⑧以降の内容を具体的に示すために、大溝（SD01）の範囲を明治期の地籍図に落としてみたのが第3図右列下段である。これを見ると、調査によって検出された溝（SD01）の部分に、東西に延びる地割が確認された。東側は、八幡神社境内地の西端で止まっている。また、調査区の南側に、L字状の地割も確認することができた。更に、この地割は、郡本八幡神社参道を跨いで更に南へ延び、境内南端の東西道延長線上の道で止まっている。また、大溝（SD01）の北側には、これと並行して古代以来の溝の存在（④、⑤）が確認されているから、本遺構がこの地割に規定されて設けられた区画である可能性を指摘することもできる。尚、郡本八幡神社境内の現参道は、地割図でも明らかなように、西へ延びて、左記の東西道に連絡しており、地割の形成過程からみて新しい道であることが推定されよう。このように見てくると、大溝（SD01）は、現五井本納線に並行して古代に設けられた溝（或いは道）に面して中世に置かれた居館の区画溝と考えることができるのではないだろうか。この際、南側に確認できるL字状の地割は、或いは、土塁等の痕跡と見ることが可能かもしれない。但し、これらの地割痕跡を中世居館とした場合でも、南半については、新たな地割によって消されてしまい、その範囲を明確に示すことができない。東側の範囲についても、郡本八幡神社境内の地割によって不明瞭であるが、鎌倉市今小路西遺跡の事例のように、隣接する居館に取り付いていた可能性も考えられよう。今後の調査によって、想定を上げていく必要はあるが、今までの調査成果などから考えると、先に紹介した平野等による「一町四方の区画」の存在については、確かに地籍図からは読み取れるものの、その成立時期はSD01溝廃絶後とするのが自然であって、再検討の余地があることを指摘しておきたい。また、古代の遺構群と中世の遺構群との間に、希薄な連続性が伺えることも、再度、指摘しておくこととしたい。またこの際、郡本遺跡群、特に郡本八幡神社境内地周辺地区については、これまでも平安時代後期から中世期の国府推定地に擬せられてきた。この点で古代国府を分けて考える必要性を再確認しておきたい。

3 海士遺跡群 久保畑地区 (遺構：図版2 / 出土遺物：図版6～10)

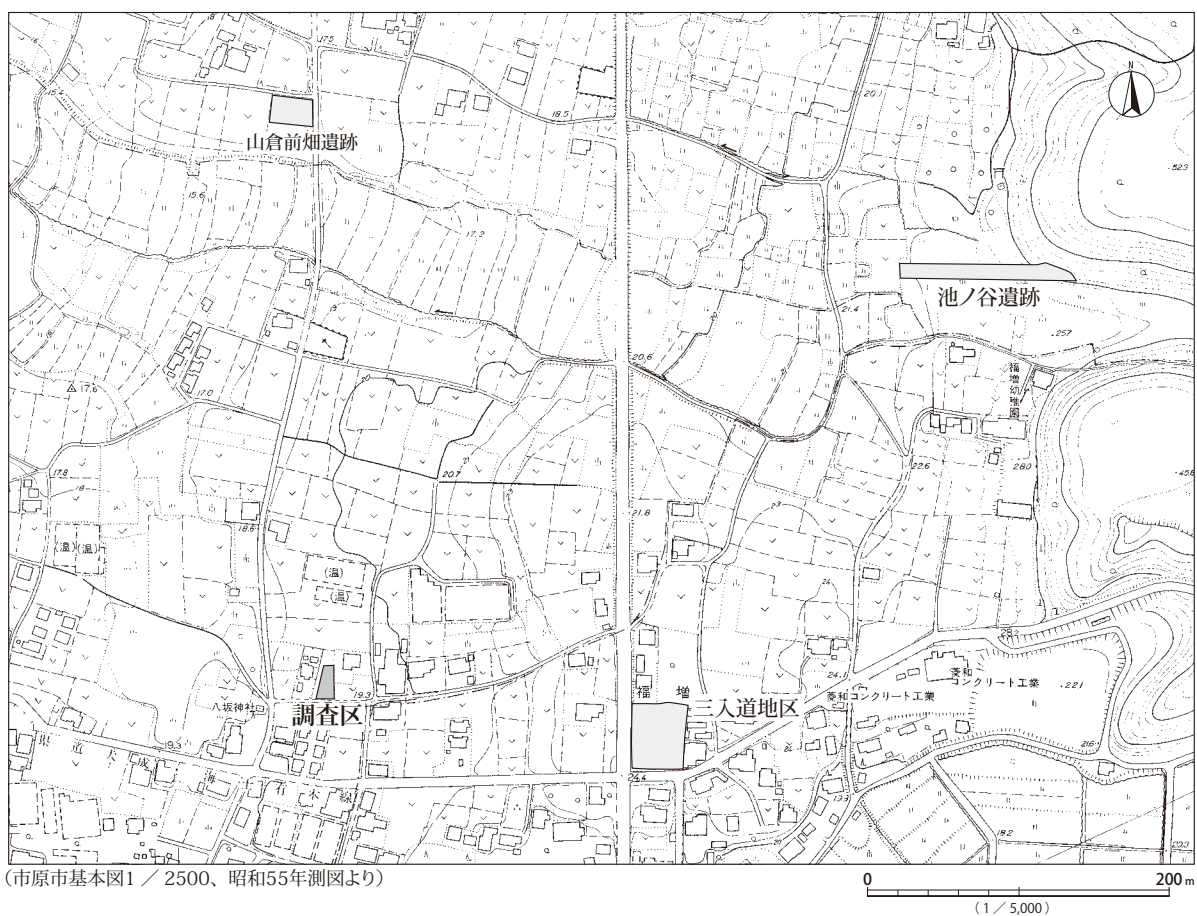
遺跡の位置と周辺の遺跡 養老川旧河口から南東に7.6kmの段丘面上で、標高は20m前後である。養老川までは西に1.1kmであり、比高差14mほどである。海士遺跡群は広域に広がる遺跡として南北0.8km、東西1.1kmにわたって包蔵地として周知されている。そのなかで、今回調査区はほぼ中央部分に位置する。東方200mには、コンビニエンスストア建設に先立ち調査がなされ(三入道地区)、弥生時代から平安時代にかけての集落跡が検出されている。

奈良・平安時代の近隣遺跡をみると、北東約500mには、雨乞い祭祀跡とみられる井戸跡を検出した池ノ谷遺跡がある。また、昨年度の調査において、南東850mの小ノ台遺跡でも竪穴建物跡5軒を検出しており、その東の台地上には武士廃寺跡を含む武士遺跡や集落跡の福増山ノ神遺跡などがみられ、当地域は奈良・平安時代には、集落や田畑が点在していた景観が想定できる。

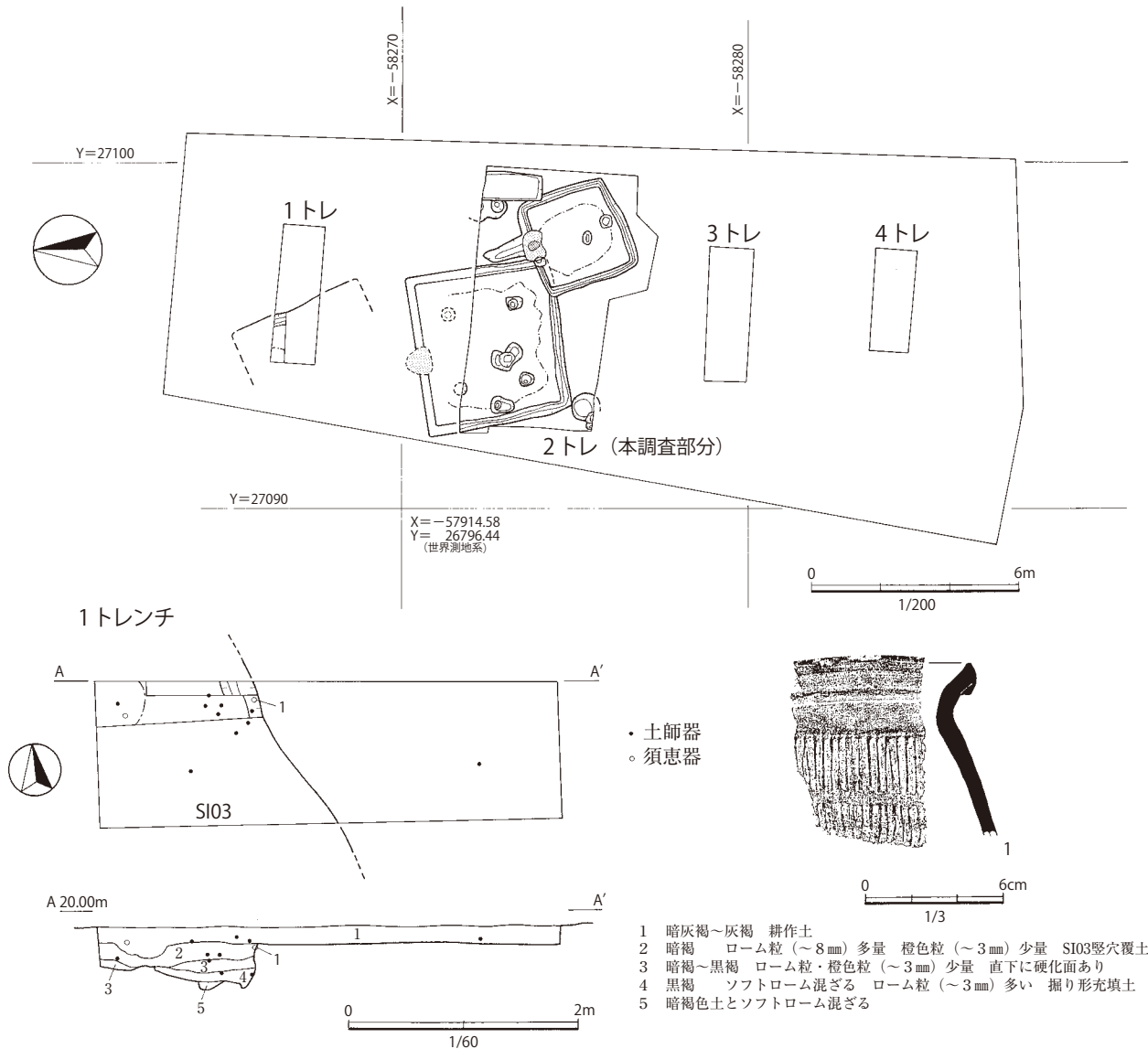
調査概要 農業用建物建設に起因する確認調査を実施した。2トレンチ部分には、耕作等の影響によりすでに貝層や竪穴建物のカマド部分が露出しており、建築物の基礎の影響が及ぶため本調査とした。

調査の結果、奈良時代8世紀中頃の竪穴建物跡1軒(SI02)、平安時代9世紀の竪穴建物跡2軒(SI01・03)を確認し、そのうちSI01とSI02の一部を本調査した。

遺構と遺物 1トレンチの遺構確認面は現地表面から20cmと浅く、竪穴建物跡SI03を確認した。サブトレンチを設定し、床面とみられる硬化面を確認し、サブトレンチ壁際の一部をさらに掘り下げ、壁周溝や床



第5図 海士遺跡群久保畑地区周辺地形図

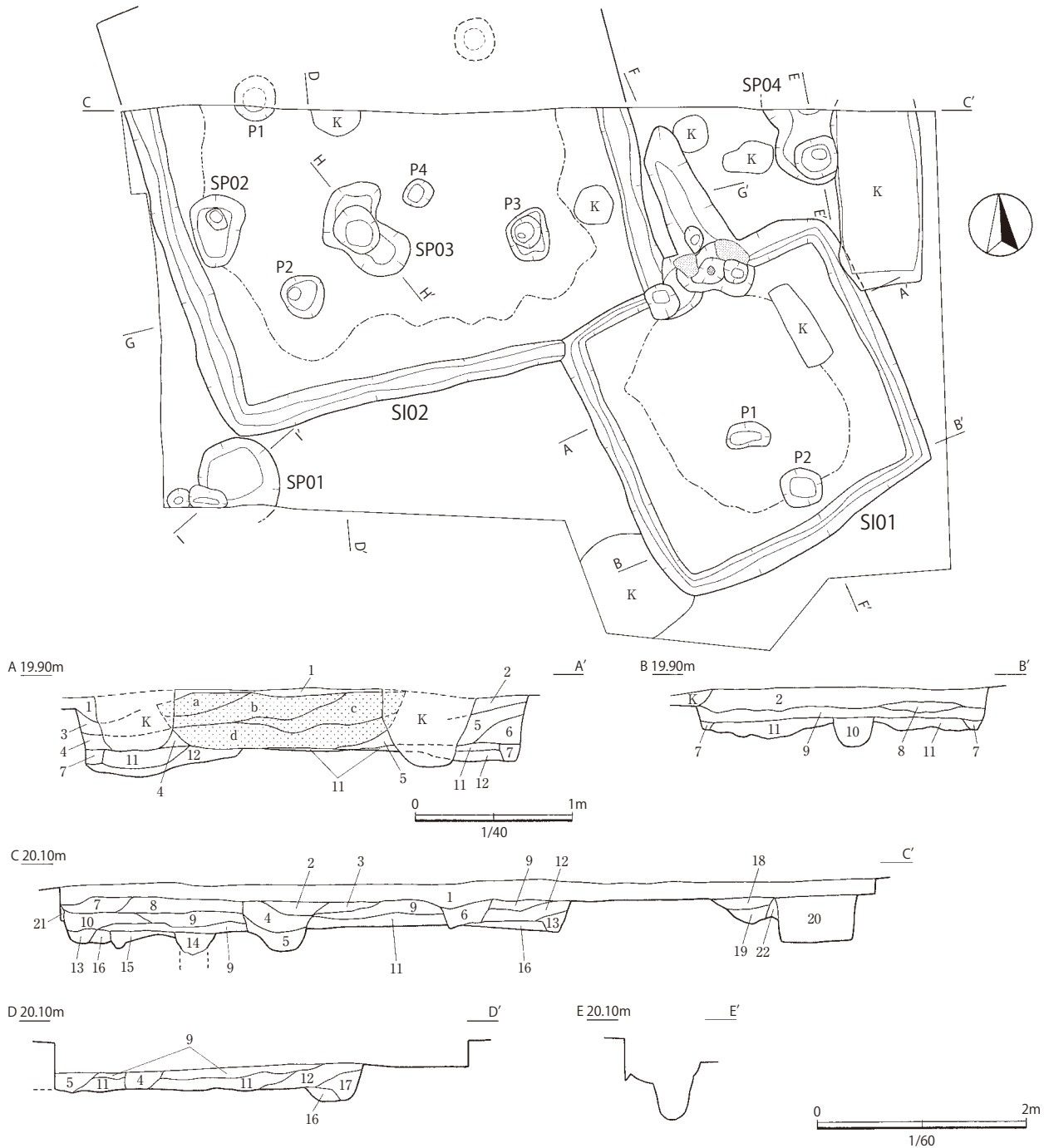


第6図 海士遺跡群久保畑地区全体図、1トレンチ実測図・出土遺物

下の掘り形などを確認した。推定主軸方位N-24°-Wで、出土遺物には弥生土器や第6図1の千葉産須恵器のタタキ甕などがみられる。後述のSI01とは主軸方位が近いこともあり、時期も近いことが想定される。

3トレンチと4トレンチは耕作や植樹による攪乱がみられた他、遺構は確認されなかった。出土遺物に縄文時代前期後半の浮島式期から興津式期にかけての破片が目立っており、付近に当該期の遺構の存在が想定される。第10図2～5・8は貝殻による施文が特徴的な浮島式期の土器である。6はキザミをもつ浮線状文が施され、諸磯b式の特徴をもち、7は折り返しの口縁部に縦方向の刻み状沈線が施され、興津式期の所産とみられる。

SI01は、2.92m×2.90mの規模で、主軸方位はN-20°-Wである。北側壁中央やや右寄りにカマドを作り、煙道が1.3mほど延びる。ソデ部分および焼土・火床面はほぼ残存しておらず、第7図には掘り形の図を掲載した。火床面と推定される中央部分に、周囲とは異質で硬質な粘土が、直径6cmほどの円形の痕跡でわずかに残存しており(円形トーン部分)、この部位に支脚を立てていたものとみられる。壁周溝は幅20～28cm、深さ7.2cm～11.2cmで巡らせる。柱穴はみられないが、中央やや南よりのP1(深さ8.4cm)と南側壁際中央にもP2(深さ22.0cm)がみられる。P2はカマドとの主軸線上のその位置からみて、出入口に関するピットの可能性もある。出土遺物は第8図1～第9図15であるが、平面分布図に点のない



SI01内貝層

- a 混土貝層～純貝層 マツカサガイ主体
- b 混土貝層～混貝土層 ハマガリ (大型) 主体
- c 混土貝層 イボキサゴ主体
- d 混土貝層～純貝層 ハマガリ・シオフキ主体 マテガイ

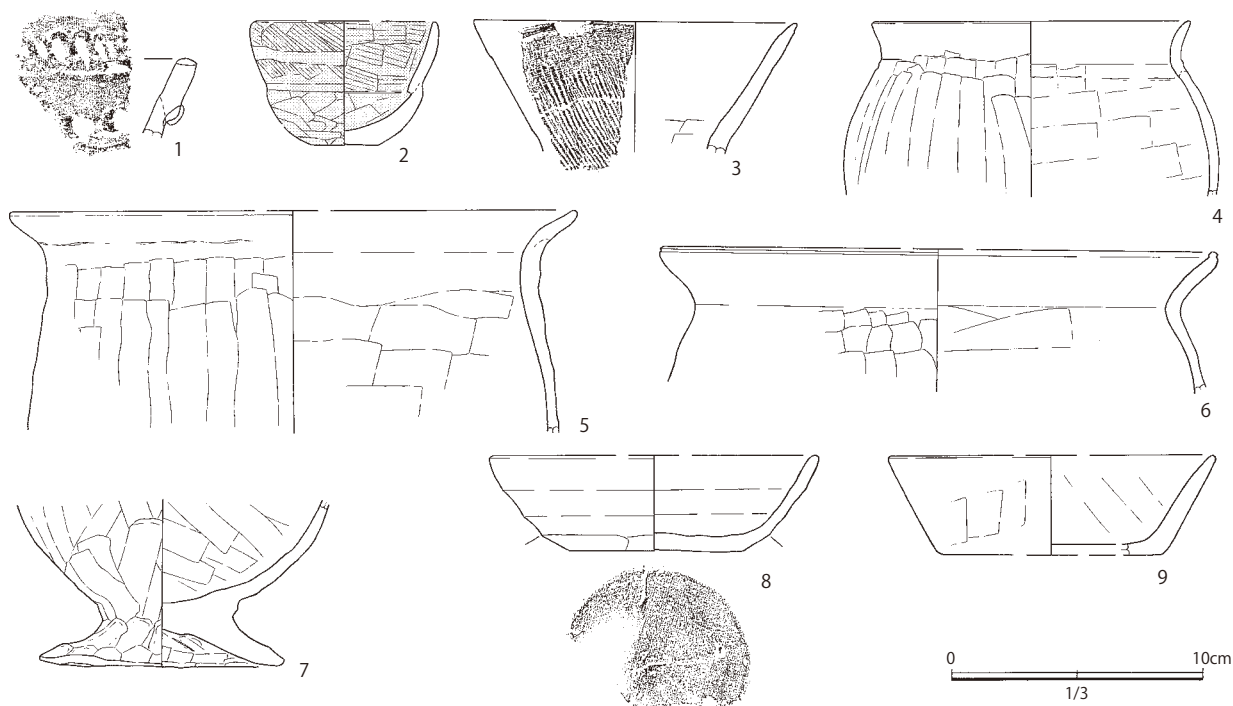
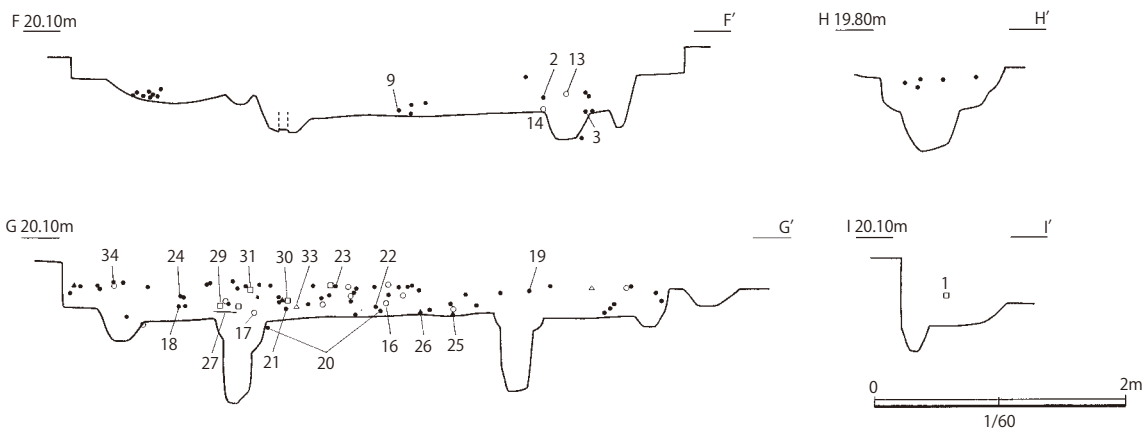
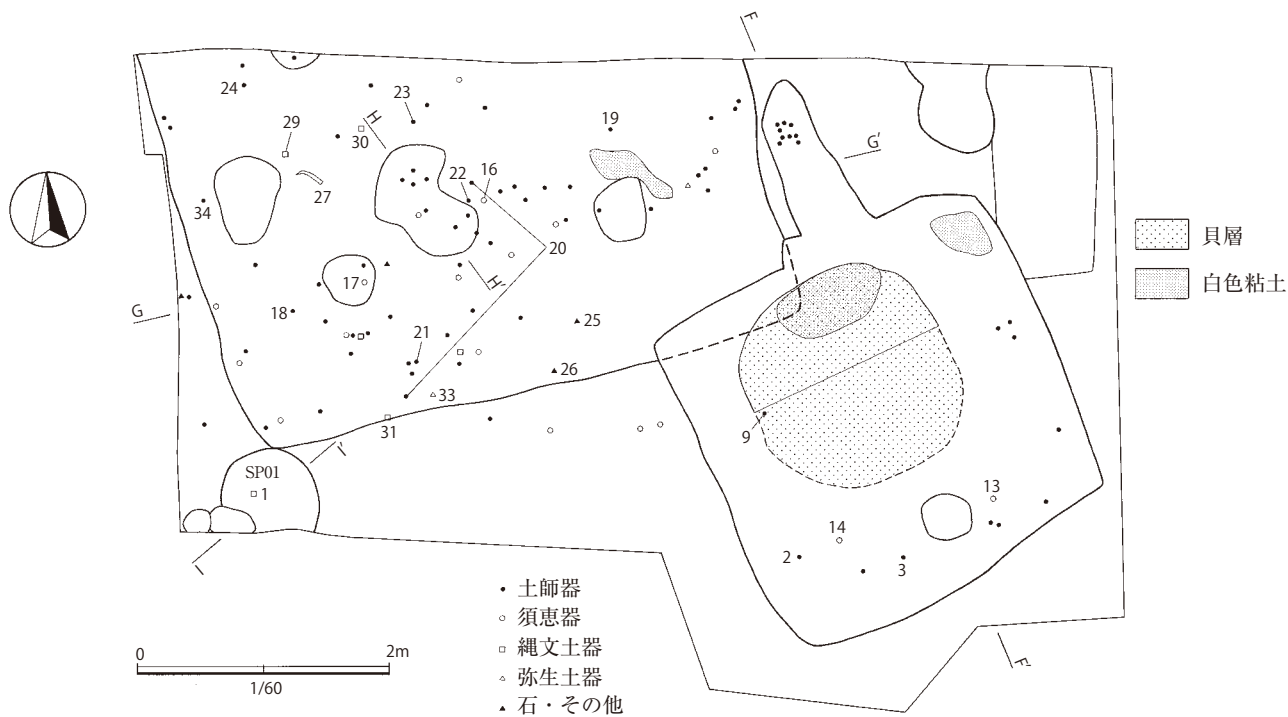
SI01覆土 (A-A'・B-B')

- 1 暗褐 耕作の影響あり
- 2 黒～暗褐 ローム粒・橙色粒 (～2mm) 少量
- 3 暗褐色土+ロームブロック (～50mm)
- 4 暗褐 ソフトローム混ざる
- 5 暗褐 ローム粒～ブロック (～15mm) 多い
- 6 暗褐 ローム粒～ブロック (～20mm) 多い ソフトローム混ざる
- 7 暗褐色土と黄灰褐色粘土まざる 周溝覆土
- 8 暗褐 ソフトローム混ざる
- 9 暗褐 ソフトローム8層より多く混ざる
- 10 黒褐 ロームブロック (～20mm) 多い P2覆土
- 11 黄灰褐色粘土と暗灰褐色土まざる 堅穴掘り形の床面及び床下充填土
- 12 黄褐色粘土に灰色土混ざる 堅穴掘り形の床下充填土

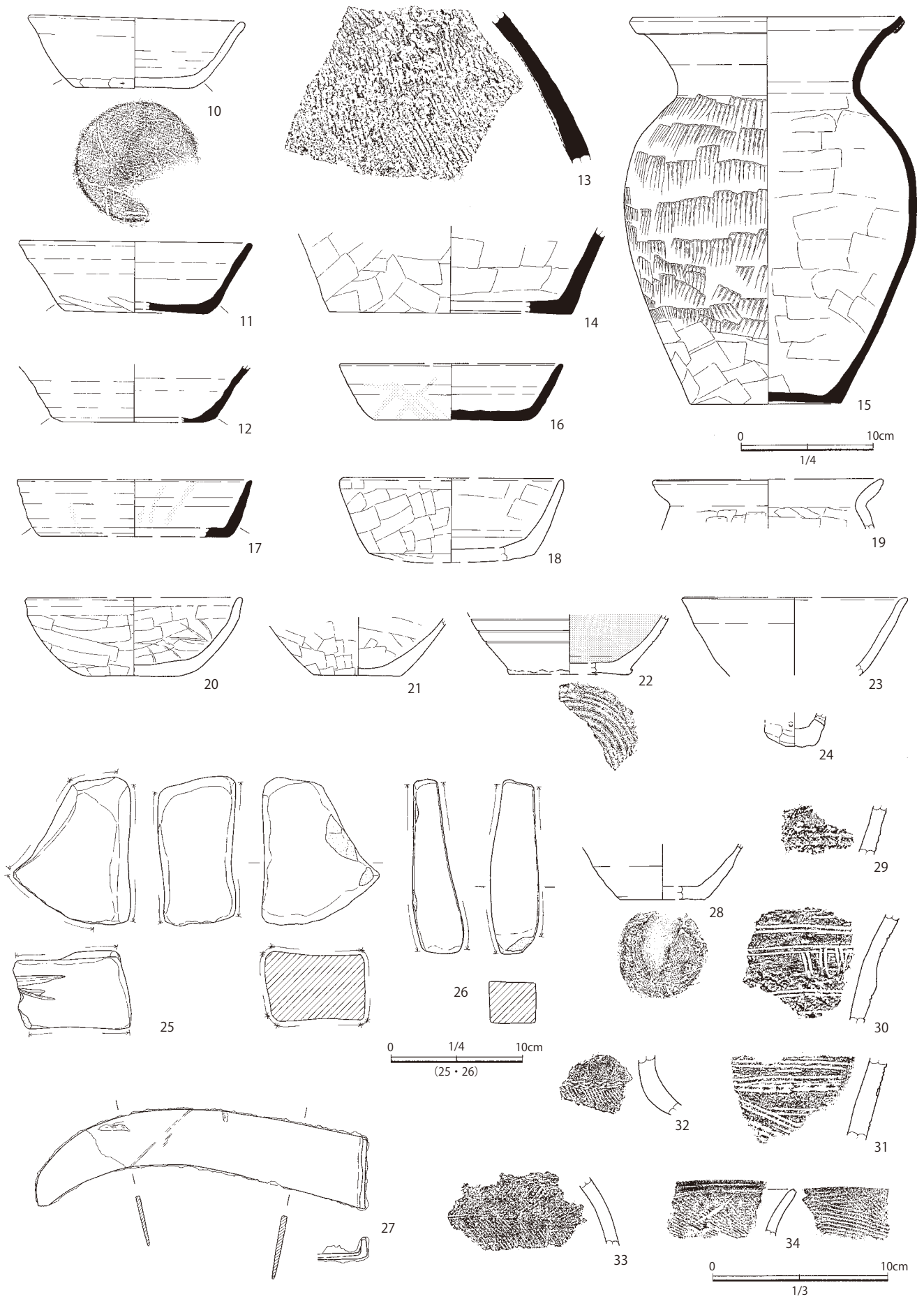
SI02覆土 (C-C'・D-D')

- 1 灰褐～暗灰褐 耕作土
- 2 暗灰褐 ローム粒・橙色粒 (～2mm) 多い
- 3 暗灰褐 ローム粒～ブロック (～40mm)
- 4 暗灰褐 3層に似るがより暗色
- 5 黒灰褐 SI02の硬化面のハードロームブロックが混ざる
- 6 黒灰褐 5層より黒色
- 7 暗褐 ローム粒・橙色粒 (～2mm) 少量
- 8 暗褐 ローム粒 (～5mm)・橙色粒 (～3mm) 多い
- 9 暗褐 ローム粒 (～6mm)・橙色粒 (～5mm) 多い
- 10 暗褐 9層+ソフトローム
- 11 黒褐 ローム粒 (～8mm)・橙色粒 (～3mm) 多い 白色粘土粒 (～3mm) 少量 ソフトローム混ざる
- 12 11層に近いが含有物少なめ
- 13 黒褐 ローム粒 (～5mm) 多量 ソフトローム混ざる 周溝覆土
- 14 黒褐 ローム粒 (～6mm) 多い 橙色粒 (～3mm) 少量 柱穴P1覆土上層
- 15 暗灰褐 白色粘土粒多量・焼土粒 (～8mm) 多い 掘り形充填土
- 16 灰褐 ロームブロック・ソフトローム混ざる 掘り形充填土
- 17 黒褐 13層+ロームブロック
- 18 黒褐 まざり少ない
- 19 黒褐 ローム粒～ブロック (～20mm) 多い 橙色粒 (～5mm) 少ない
- 20 暗灰 ロームブロック (～30mm) 混ざる やや古い耕作痕か
- 21 暗褐 遺構外堆積土
- 22 黄褐 ソフトローム

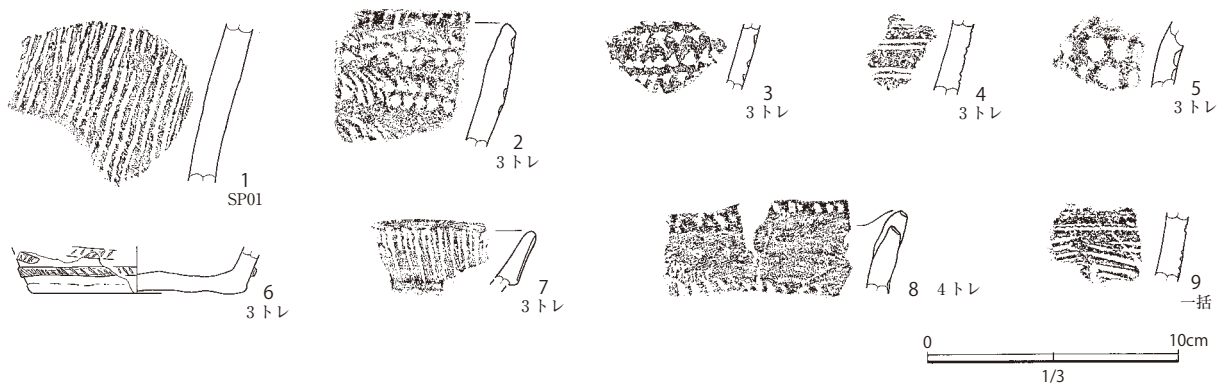
第7図 本調査範囲SI01・SI02・SP01～04実測図



第8図 SI01・SI02遺物分布図、SI01出土遺物(1)



第9图 SI01出土遺物(2)、SI02出土遺物



第10図 SP01出土遺物、3・4トレンチ出土遺物

4～8・10～12・15は、耕作等により貝層内およびその周囲から出土したものである。杯やタタキ甕、14の千葉産須恵器の甕などからみて、9世紀前葉頃に廃絶された竪穴と考えられる。

また、竪穴中央部分や北壁寄りには、平面円形状で椀型に貝層が形成されていた。ほぼ全量の貝層を採取したところ、水洗フルイ後重量は382,200gであった。そのうち竪穴内に残存し状態の良い北側の堆積部分136,050g（第8図実線囲みトーン部分・総量の35.6%）を分析した。内容についてはp14の分析原稿に詳述する。貝層は床面直上から堆積しており、竪穴廃絶直後から投棄し始めたものとみられるが、覆土を掘り込んで埋めたと解釈することも可能ではある。ただ、貝層内からは竪穴覆土の出土遺物と同時期の遺物（第8図9、第9図10・11・15）が含まれており、竪穴の埋没時期と貝層の形成時期とはそれほど差がないものと考えられる。

SI02は竪穴の南半分強を調査した状態である。東西軸は4.65mで、主軸方位はN-7°-W。壁周溝が巡り、幅22～38cm、深さ10.5cm～14.8cmである。柱穴はP2（深さ67.3cm）・P3（深さ68.7cm）を持つが、P1は壁際で部分的に検出し掘り下げ、位置を確認したのみである。他のピットは、中央付近にP4（深さ17.4cm）がみられた。硬化した床面上には部分的にカマド構築材とみられる白色粘土ブロックがみられた。未調査の北側壁にカマドを有するものとみられる。

出土遺物は第9図16～34である。永田窯産とみられる須恵器杯2点（16・17）が床面レベル付近から出土しており、永田窯のⅡ期後半頃に相当することから、8世紀中頃の竪穴建物跡と推測される。他に、硬化した床面から5センチほど浮いたところで27の鉄製鎌が置かれたように出土した。保存状態は良好であり、表面の一部（特に出土状態下側の面）に藁のような植物繊維の付着が観察される。また、鎌から2.5mほど離れた南壁の際に、二つの砥石（25・26）が床面直上から出土している。二つともよく使いこまれており、25は砂岩の自然石を用い、すべての面及び一部の角も使用している。26はきめ細かい凝灰質の砥石であり、粗砥と仕上げ砥石とのセットで使用されていたのかもしれない。

29～31は縄文時代前期浮島式期の土器であり、32・33は弥生時代後期の土器、34は古墳時代前期の土器である。これらの時期の遺構も付近にある可能性が高い。

その他、SP01～04を検出した。SP01は最大径79cm、深さ16.2cmであり、第10図1の縄文時代早期前葉稻荷台式期の土器が出土した。SP02は長軸67cm、SI02床面からの深さ53.1cm、SP03は長軸97cm、同深さ60.9cmで、共に覆土観察からSI02より新しい時期のピットである。出土遺物は土師器小片が多く時期は不明瞭であるが、それほど離れた時期のものではないとみられる。

海士遺跡群久保畑地区検出の貝層について

貝層の概要と分析内容 貝層はSI01竪穴建物跡内に堆積したもので、規模は最大170cm×160cm、厚さ35cmほどであった。貝層は、発掘調査以前にその一部が畑の耕作などにより掘削を受けており、土嚢袋40袋分（水洗後重量246,150g）が掘り出されていた。遺構内に残存するもののうち、保存状態が良い部分について堆積状態を断面で観察した後、層序ごとに土嚢袋に詰め分析対象とした。層序は、土の混入度合いと貝種の違いからa～dの4つに分層でき、厚さはそれぞれ10cm程度であった。サンプル量は総数23袋で、自然乾燥後に重量を測定したところ約298kgあり、その後10・4・1mmの3種類のフルイを使って水洗いしたところ約136kgに減じた。混土率は4層とも50%前後で、総体では54.4%であった（表1）。フルイ上残留物については、貝類を主体に分類・同定・集計・計測作業をおこなった。内容物の主体は貝類であるが、この他に若干の獣骨類、魚骨類が含まれ、炭化物もわずかに含まれていた。この中には数点の炭化米もみられた。また、陸産微小貝は多量に検出されており、特にb層とd層に顕著であった（表2）。

貝類について（図版9・10） 検出された貝類を層序別に示したのが表2・第11図である。鹹水産巻貝7種、鹹水産二枚貝9種、淡水産巻貝1種、淡水産二枚貝1種の計18種がある。このうち主体を成すのはイボキサゴであるが、その比率は下層にいくほど顕著になる。イボキサゴ以外で多くみられるのは二枚貝ではハマグリ・シオフキ・マテガイ・マツカサガイ・アサリ・カガミガイ、巻貝ではウミニナ・アラムシロであるが、これらの比率は層位によって異なる。このうち特に注目されるのはマツカサガイ (*Inversidens japonensis*) である。この種は、a・b層に集中してみられ、とくにa層に顕著な集積があった。おそらくまとめて廃棄されたものであろう。マツカサガイは淡水種で、「北海道から九州に分布し、水のきれいな川の砂礫底

に生息する。殻長約6cm。殻はやや厚い。殻頂付近にさざなみ状の彫刻がある。殻皮は黒く、厚い。内面は真珠光沢が強い。』^{*1}ことを特徴とする。本貝層サンプル中から検出されたマツカサガイの総個体数は624で、イボキサゴを除く貝種中ではハマグリ・シオフキ・マテガイに次ぐ第4位であり、いかに主体的な存在であるかがわかる。マツカサガイは、縄文時代の貝塚中でも主体種として存在することはなく、比較的多く検出された祇園原貝塚の安行1・2式の竪穴住居内貝層中の事例でも総数18点、西広貝塚の斜面貝層部安行1・2式の貝層中の事例でも総数22点とわずかなものであった。鹹水産の貝類を多量に採集できる環境にありながら、あえて淡水産の二枚貝をも採集している背景には、単なる嗜好以外に別の目的があった可能性もある（例えば、貝殻内面の真珠光沢部分の利用など）。この他、サザエがb層中から1点出土している。縄文貝塚でまれに検出される蓋部分ではなく本体部分であり、また遊離してしまっているが棘部も複数採集できた。サザエの生息域は岩礁地帯であるので、この付近では最短でも富津岬より南の内房域か、勝浦・鴨川など外房域まで行かなければ採集できない。身もしくは貝殻を目的とした搬入品とみられる。

貝類の大きさについて 貝層の主要貝種であるハマグリ・シオフキ、そしてマツカサガイの殻高計測値を層序別に示した（第11図）。マツカサガイはa層のみで25mm前後を主とする。ハマグリは30～45mm前後を主体とし、下層にいくほどサイズが大きくなる傾向がある。シオフキは35～40mmを主体とし、層序による顕著な違いはない。

魚類について（図版10） 魚骨はd層を中心にわずかであるが検出されている。同定できたのは、マアジの稜鱗136点、ニシン科の脊椎骨3点、キスの脊椎骨4点である。

獣類について 獣骨については、ヘビ脊椎骨が6点検出できたにすぎない。

^{*1} 奥谷喬司2004『世界文化生物大図鑑 貝類』世界文化社

表1 海士遺跡群久保畑地区 貝層サンプル基礎データ・内容物組成

層位	水洗前重量(g)	フルイ後残留物重量(g)				土壌重量(g)	混土率(%)	貝殻重量(g)	加工対象貝重量(g)	貝殻破砕率(%)
		10mm	4mm	1mm	計					
a	13,800	3,500	1,580	960	6,040	7,760	56.2	5,901.1	2,432.4	58.8
b	79,500	31,920	3,570	2,050	37,540	41,960	52.8	37,244.5	25,493.4	31.6
c	21,400	9,500	770	470	10,740	10,660	49.8	10,730.8	9,498.7	22.9
d	183,850	69,400	8,180	4,150	81,730	102,120	55.5	81,615.4	65,751.8	19.4
計	298,550	114,320	14,100	7,630	136,050	162,500	54.4	135,491.8	103,134.0	23.9

層位	人工遺物		自然遺物												
	土器		礫		軽石		獣骨		魚骨		フジツボ		微小貝		炭化物
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量	重量	重量	点数	重量	点数	重量	重量		
a	11	47.2	46	90.6	0	0	0	0	0	0	530	0.3	0.8		
b	61	176.6	79	110.1	1	+	+	+	17	0.3	1,050	3.1	5.3		
c	14	7.4	8	0.2	0	0	0	+	1	+	555	0.6	1.0		
d	121	99.7	130	4.4	0	0	+	+	6	+	1,832	1.2	9.3		
計	207	330.9	263	205.3	1	+	+	+	24	0.3	3,967	5.2	16.4		

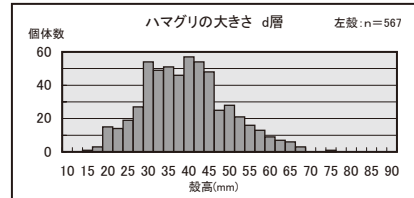
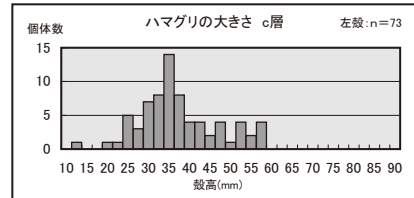
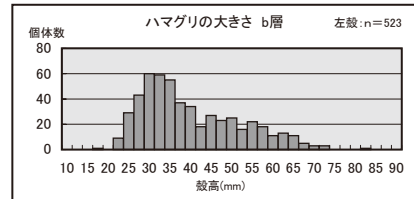
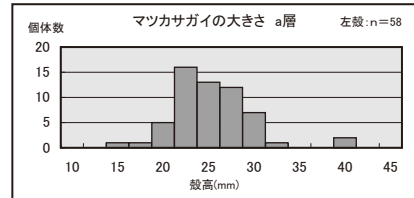
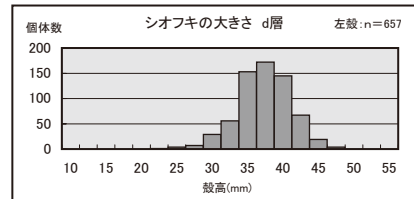
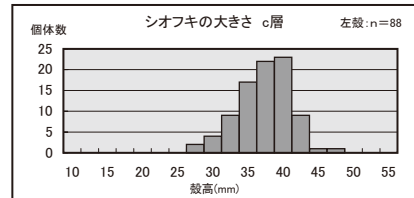
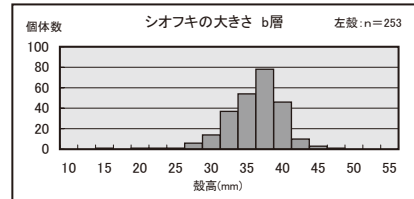
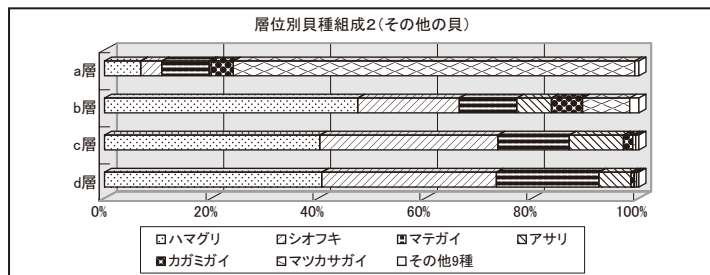
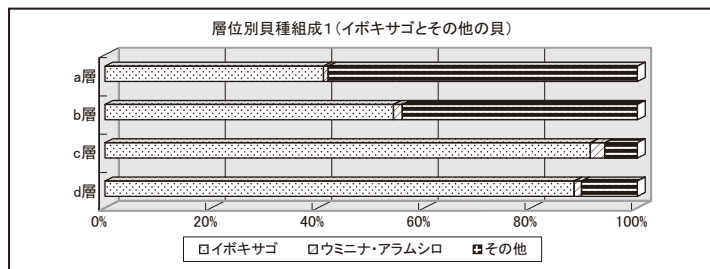


表2 海士遺跡群久保畑地区 貝類データ・層位別個体数

貝種名	層位							計	比率%
	a層	b層	c層	d層	計	比率%			
イボキサゴ	375	2,860	5,115	34,549	42,899	84.1			
ウミニナ	6	49	77	363	495	1.0			
アラムシロ	2	38	74	183	297	0.6			
その他(下表組成2)	531	2,332	345	4,116	7,324	14.3			
計	914	5,279	5,611	39,211	51,015	100.0			
組成2 (その他の内訳)									
ツメタガイ	2	28	1	9	40	0.6			
アカニシ	0	4	0	0	4	0.1			
サザエ	0	1	0	0	1	0.0			
オオタニシ	2	0	0	0	2	0.0			
ツボミガイ	0	0	0	1	1	0.0			
ハマグリ	36	1,105	139	1,673	2,953	40.3			
シオフキ	21	443	115	1,345	1,924	26.3			
マテガイ	47	251	46	790	1,134	15.5			
マツカサガイ	399	206	2	17	624	8.5			
アサリ	2	151	35	247	435	5.9			
カガミガイ	22	136	6	26	190	2.6			
マガキ	0	2	1	4	7	0.1			
オキシジミ	0	4	0	2	6	0.1			
バカガイ	0	0	0	2	2	0.0			
イチョウシラトリ	0	1	0	0	1	0.0			



第11図 海士遺跡群久保畑地区貝種組成グラフ・殻高計測グラフ

4 山新遺跡 第6地点 (遺構：図版3 / 出土遺物：図版7・10)

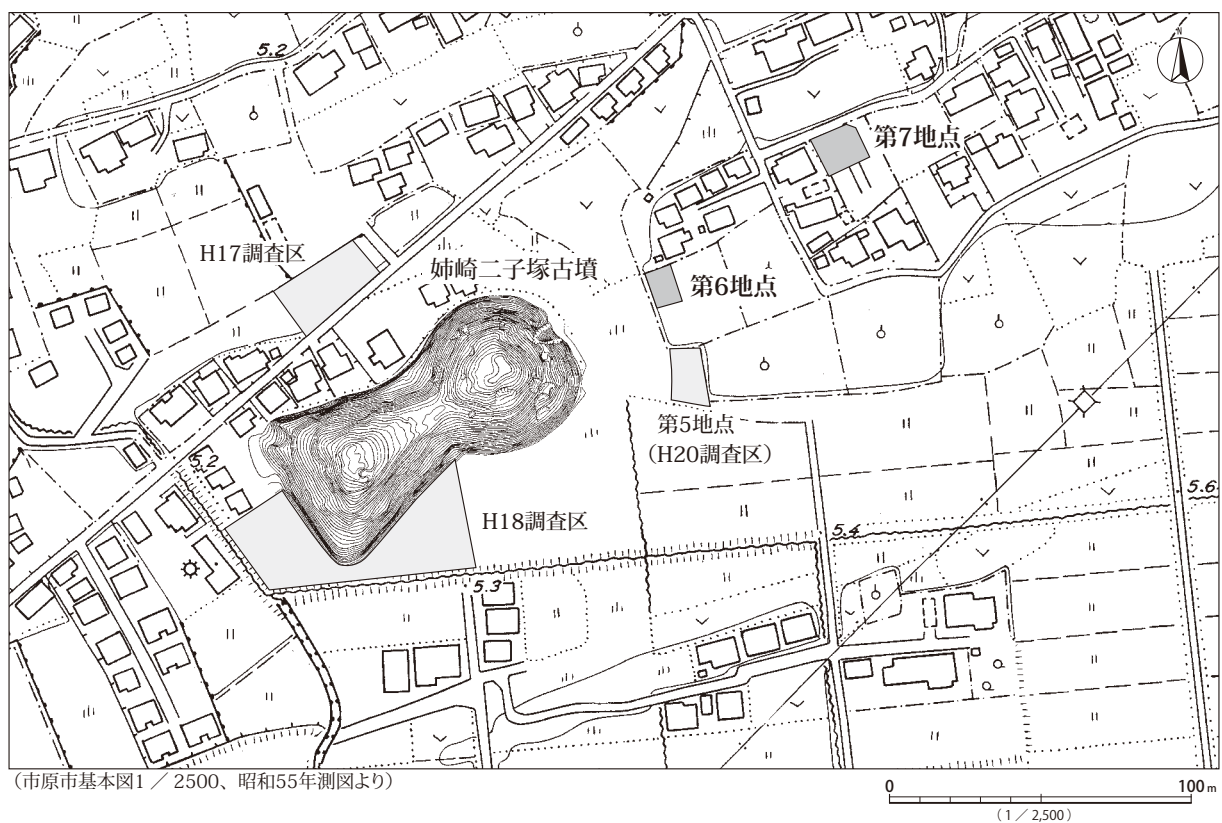
遺跡の位置と近隣の調査 東京湾を西に望み、北東から南西方向へと延びる標高5～6mほどの砂堆列上に位置する。また、調査区は姉崎二子塚古墳の後円部墳丘裾から北東側30mに位置し、その墳丘をとりまく地割りの形などから、この地点は周溝推定部分の隣接地である。

山新遺跡は、この砂堆上を中心にひろがっており、南北約1km、東西約1.1kmの広大な範囲を占める。椎津から八幡へと抜ける都市計画道路がこの砂堆を縦断するに先立ち、平成10年度から4回の調査がなされてきている。平成15年度に行った、調査区東側100mほどの第3地点における路線の本調査では、古墳時代中期の円墳や集落跡などを確認している（『市原市文化財センター年報 平成15・16年度』財団法人市原市文化財センター）。また、近隣における市内遺跡事業での平成17・18年度の確認調査地点は、共に二子塚古墳周溝内の調査である。一方、一昨年度調査の第5地点では遺構がみられず、周溝の外側であることが確認された。したがって、今回調査区も周溝の外側であることが類推された。

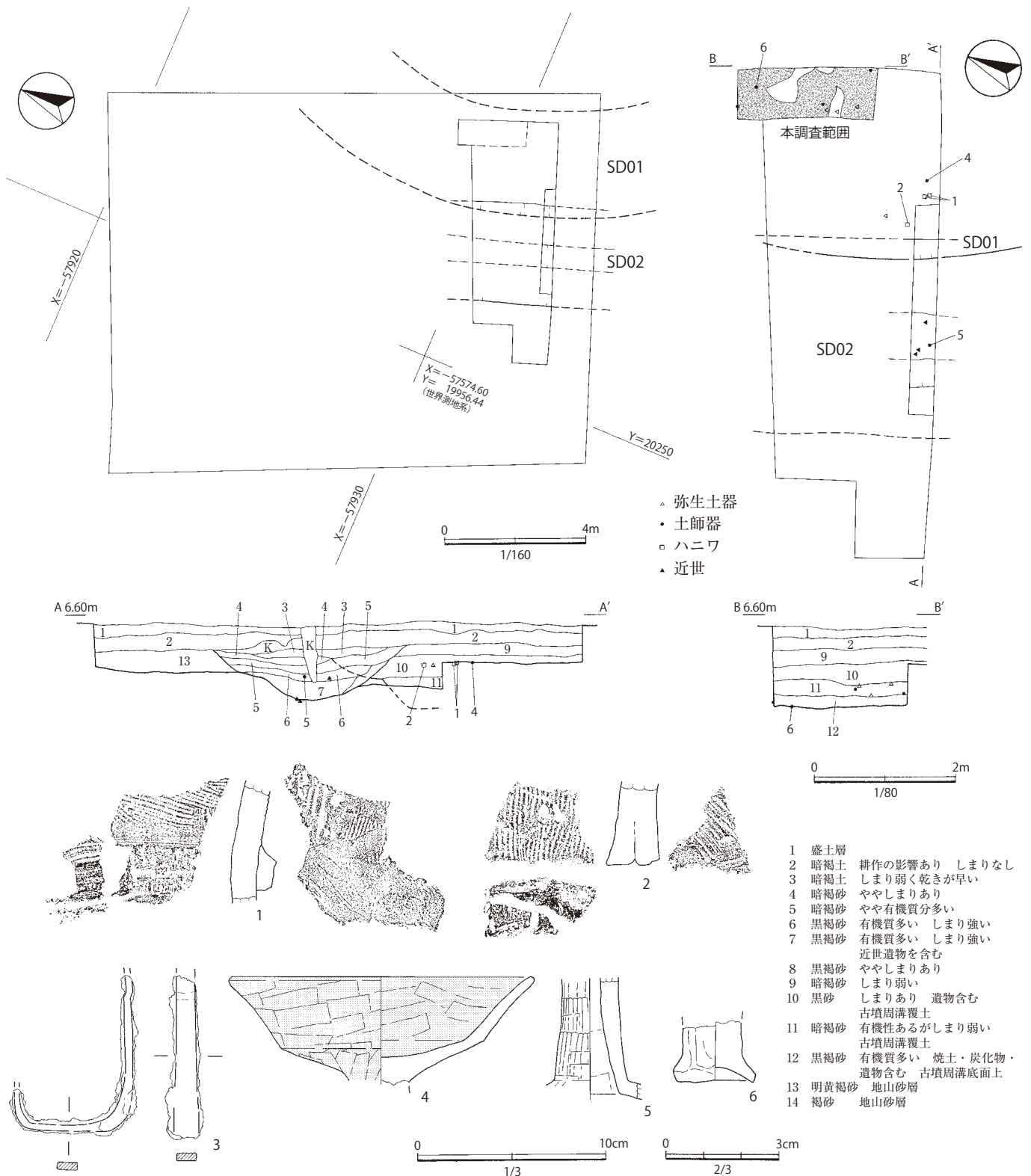
調査概要 個人住宅建設に先立ち確認調査を実施した。調査区の標高は6.5mほどであり、遺構確認面は6.1～6.2mであった。目の前に広がる推定周溝部分は調査区より一段低く湿地帯となっており、その標高は5.3mほどであった。周溝部分と前面道路との境界ラインにはコンクリート壁で崩落防止策がなされる。

トレンチは母屋の基礎部分を避けて、本調査が必要な浄化槽部分を含む形で設定した。遺構確認面は、明黄褐色砂層でしまりが弱く砂浜そのもののような状態であり、古墳周溝1条（SD01）と近世の溝跡1条（SD02）を確認した。本調査部分はSD01の底面にあたり、底面レベルは5.3mほどであった。

周溝底面直上の覆土には焼土と炭化物が多く含まれていた。墳丘は調査区東側にあったものとみられ、



第12図 山新遺跡第6・第7地点周辺地形図



第13図 山新遺跡第6地点全体図、1トレンチ実測図・出土遺物

出土遺物から、二子塚古墳築造に近い中期後半と推定される。第13図1の円筒埴輪は、突帯が一部剥がれて接着面には細かい筋状の線刻が密に観察される（図版10）。2は底面に粘土紐の接合部分が残る。3の鉄製品は、時期・用途共に不明である。6は小型の手づくね土器の脚部分である。他の出土遺物は、弥生土器、須恵器、近世陶磁器などの小破片がみられた。

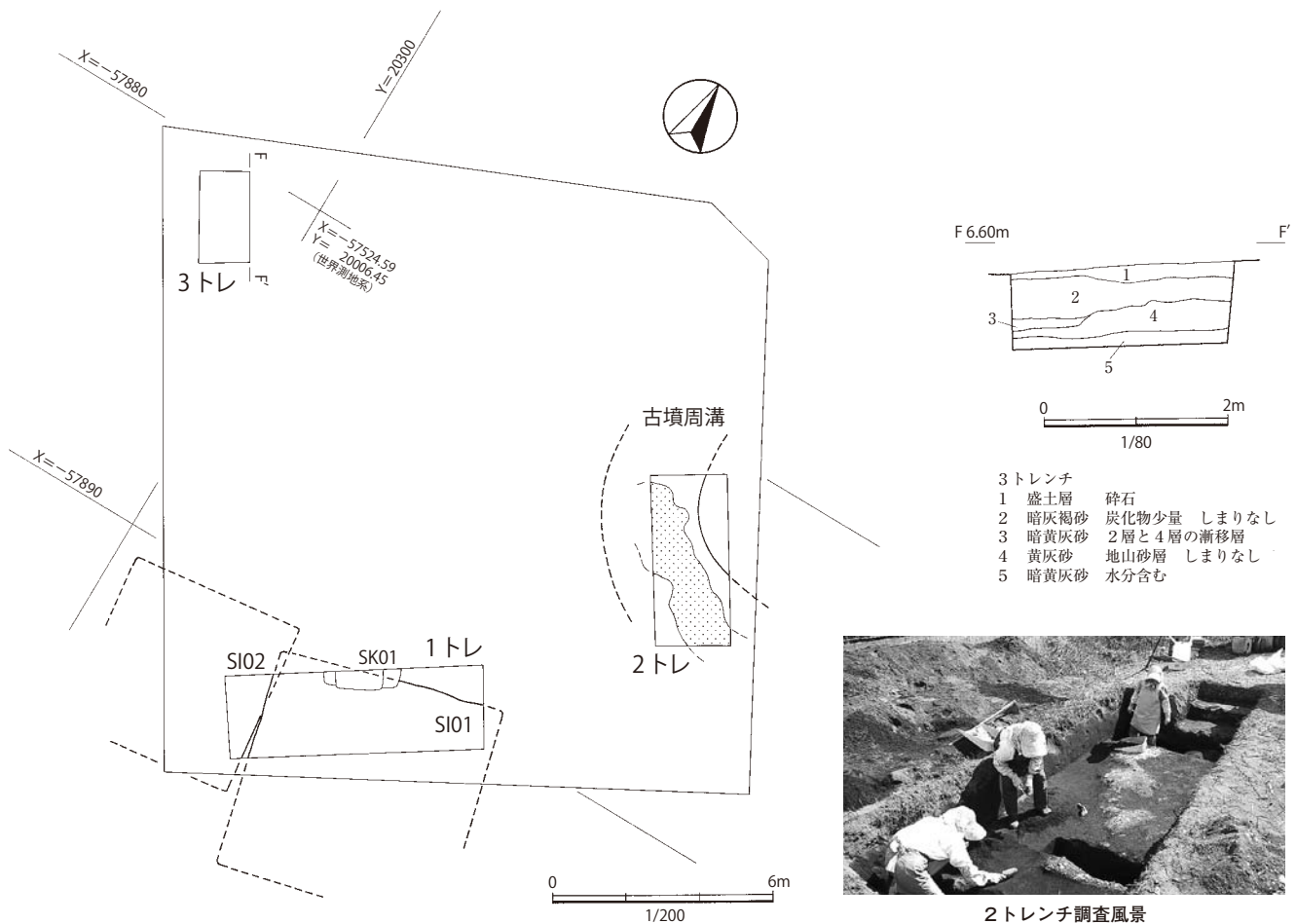
5 山新遺跡 第7地点 (遺構：図版3・4 / 出土遺物：図版7・10)

遺跡の位置 調査区は、姉崎二子塚古墳の後円部墳丘裾から北東側100mほどに位置し、古墳のつくられた砂堆の北東方向延長上にある(第12図周辺地形図参照)。未整理のため第12図には掲載していないが、山新遺跡第3地点として、調査区の南東40mという直近部分において、平成15年度に八幡椎津線建設に伴う本調査を実施しており、中期の円墳群と竪穴建物跡等を検出している。

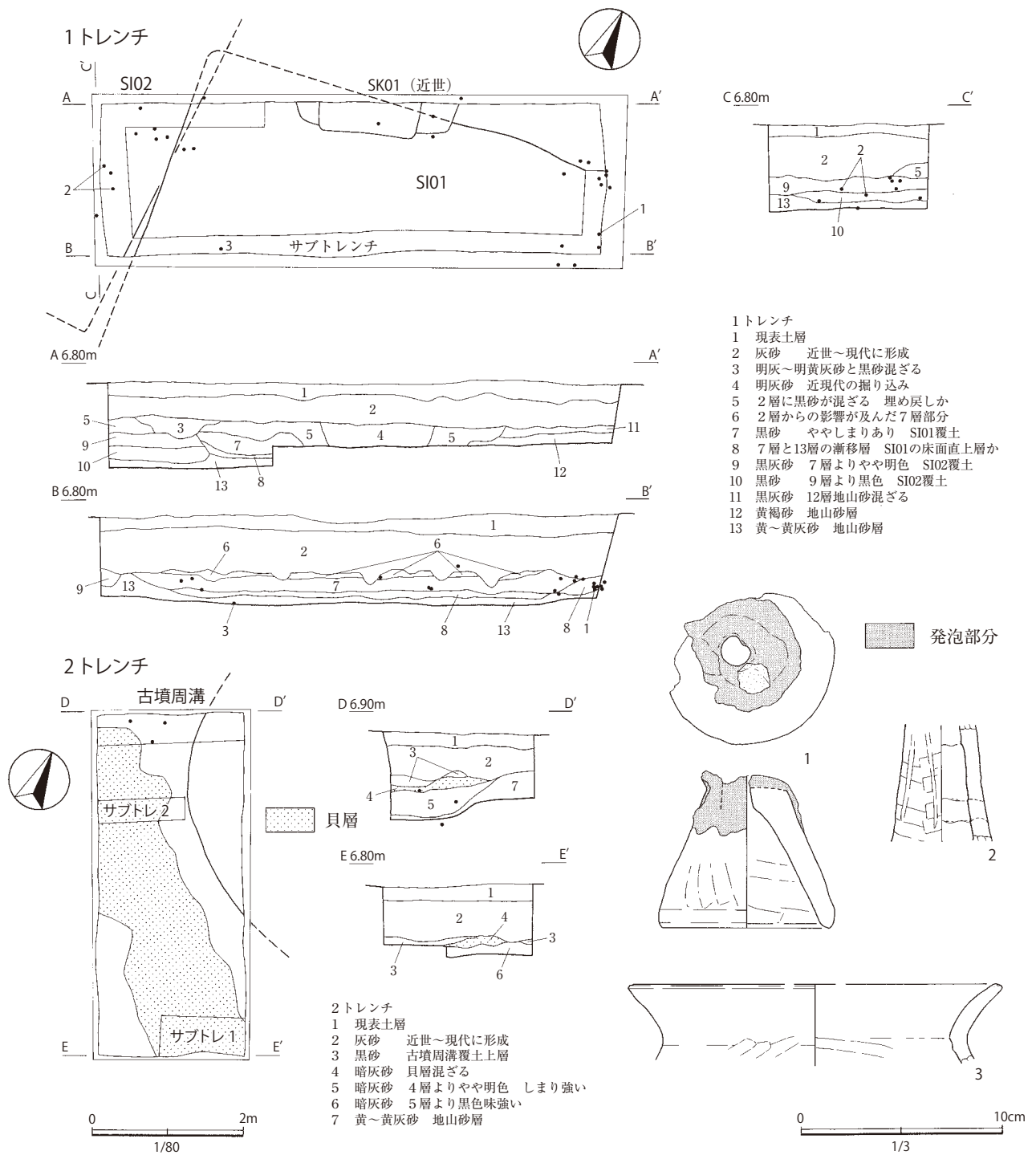
調査概要 個人住宅建設に先立ち確認調査を実施し、トレンチは母屋の基礎部分を避けた形で設定した。現標高は6.4~6.6mほどである。調査の結果、1トレンチで古墳時代前期の竪穴建物跡2軒と近世の土坑1基、2トレンチでは帯状の貝層を伴う周溝1条を確認した。3トレンチは浄化槽設置部分であるため本調査としたが、遺構は検出されなかった。

遺構と遺物 遺構確認面はこれまでの山新遺跡の調査と同様、しまりのない黄褐色砂層である。1トレンチでは竪穴建物跡2軒(SI01・02)がわずかに重複して確認された。確認面の大半が黒色砂の遺構覆土であり、周囲にサブトレンチを設定し掘り下げた。遺構の底面とみられる部位に硬化面などは検出されなかったが、土層断面の形状と遺物の出土状況からみて、2軒の竪穴建物跡と判断した。

SI01・02の掘り形底面のレベルはともに5.5m前後であるが、トレンチ北側壁の2軒が切り合う土層断面部分では、SI02はやや深く掘り込まれている。土層からSI01がSI02を壊して作られていることが観察



第14図 山新遺跡第7地点全体図、3トレンチ実測図



第15図 1・2 トレンチ実測図、1 トレンチ出土遺物

される。SI01・02ともにハケナデ調整の土師器片がみられるため、古墳時代前期の竪穴建物跡と考えられる。須恵器片はみられなかった。

特徴的な出土遺物として、SI01の床面付近から第15図1の羽口が出土している。台付甕の脚部を羽口に転用したものとみられ、端部はオリーブ色がかってふくらみ、発泡している（図トーン部分）。あるいは鉄分などの溶けたものが付着しているようにもみえる。周囲の覆土からは鉄滓9点248.8gが検出されており、その中には椀型滓とみられるものが2点含まれている（図版7参照）。これらは小鍛冶の痕跡とみ

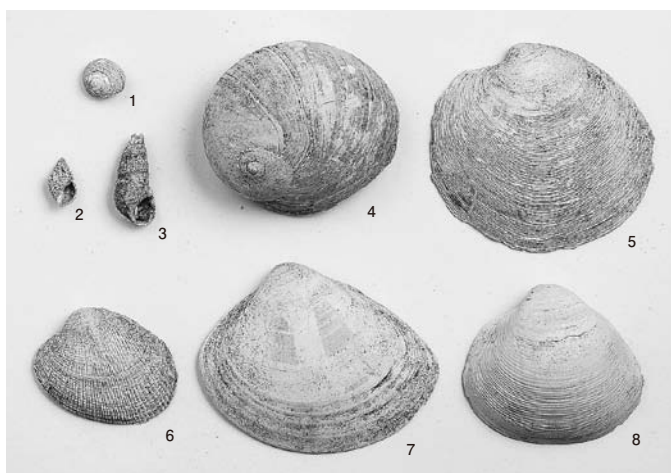
表3 山新遺跡第7地点 貝層サンプル基礎データ・内容物組成

サンプル箇所	水洗前重量(g)	フルイ後残留物重量(g)				土壌重量(g)	混土率(%)	貝殻重量(g)	加付対象貝重量(g)	貝殻破砕率(%)
		10mm	4mm	1mm	計					
2トレ1	79,850	13,950	14,100	2,900	30,950	48,900	61.2	30,846.1	6,746.6	78.1
2トレ2	21,000	4,700	2,050	500	7,250	13,750	65.5	7,245.9	1,605.0	77.8
計	100,850	18,650	16,150	3,400	38,200	62,650	62.1	38,092.0	8,351.6	78.0

サンプル箇所	人工遺物		自然遺物								
	土器		礫		獣骨重量(g)	魚骨重量(g)	フジツボ		微小貝		炭化物重量(g)
	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)			点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	
2トレ1	11	3.0	231	99.5	0	+	0	0	189	0.1	1.3
2トレ2	8	0.6	27	2.7	0	0	0	0	6	+	0.8
計	19	3.6	258	102.2	0	+	0	0	195	0.1	2.1

表4 山新遺跡第7地点 貝類データ

貝種	サンプル箇所		計(点)	比率%
	2トレ1	2トレ2		
イボキサゴ	57	0	57	1.6
アラムシロ	6	0	6	0.2
ツメタガイ	6	3	9	0.3
ウミニナ	1	0	1	0.0
シオフキ	2,178	80	2,258	61.8
アサリ	447	77	524	14.3
ハマグリ	421	103	524	14.3
カガミガイ	158	102	260	7.1
バカガイ	8	0	8	0.2
マテガイ	3	0	3	0.1
オキシジミ	2	0	2	0.1
計	3,287	365	3,652	100.0



1. イボキサゴ 2. アラムシロ 3. ウミニナ 4. ツメタガイ
5. カガミガイL 6. アサリL 7. ハマグリL 8. シオフキL

られ、周辺にその工房があった可能性が高い。古墳時代前期まで遡る鍛冶痕跡は市内では初見とみられ、時期的には差があるものの二子塚古墳（5世紀中頃築造）の近隣地でもあり、興味深い事例である。

2トレンチでは確認面付近で貝層を検出した。貝層は、最大厚さ15cm、最大幅1.3m、長さ4.8mにわたる帯状に確認された。確認面レベルは5.9m～6.0mであった。サブトレンチを3カ所設定し、そのうちサブトレ1と2の2カ所からサンプルを採取した。土層断面から、古墳の周溝覆土最上層に形成されていることが観察された。直上は近世～現代の耕作等の影響を受けた灰色砂層であるが、貝層に黒色砂がかぶる部分もあり、貝層内には土師器小片も含まれていたことから、周溝覆土に伴う時期の貝層であると判断した。

貝層の確認面付近は破砕貝が多く見られ、周溝がほぼ埋まってから周溝に沿って帯状に敷いてあるようにも見受けられたが、路面に使用されたような硬化部分は確認できない。サブトレ内の貝層サンプルの詳細は表3・4の通りであるが、特徴として組成の6割強をシオフキが占めることがあげられる。近隣の妙経寺貝塚のようにイボキサゴが多く占めるような縄文時代の貝層とは異なる組成を示す。サンプル量のわりに陸産微小貝が195点と比較的多く含まれている。

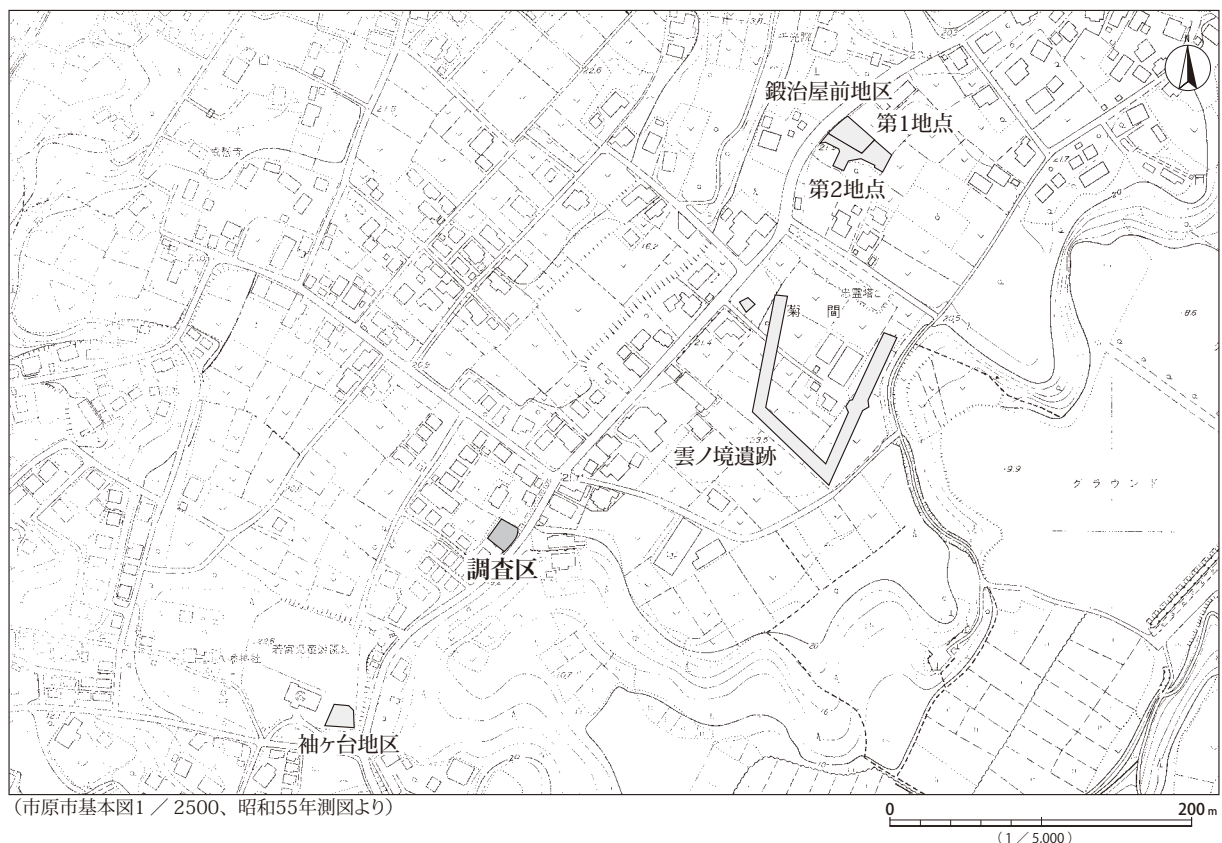
周溝は、確認面からの深さは55cmほどである。外側の掘り込みを確認できなかったため、溝の幅は判断としない。周溝内側縁とみられる肩のラインが弧を描いているため、八幡椎津線（第3地点）の調査によって多く確認されている中期の円墳群の一部であろう。周溝内の出土遺物は土師器小片であり、遺物から時期は確定できない。墳丘部分は近現代層によって削平を受けており、確認できない。

他の出土遺物は古墳時代土師器・埴輪のほか、縄文・弥生土器などの小破片がみられた。

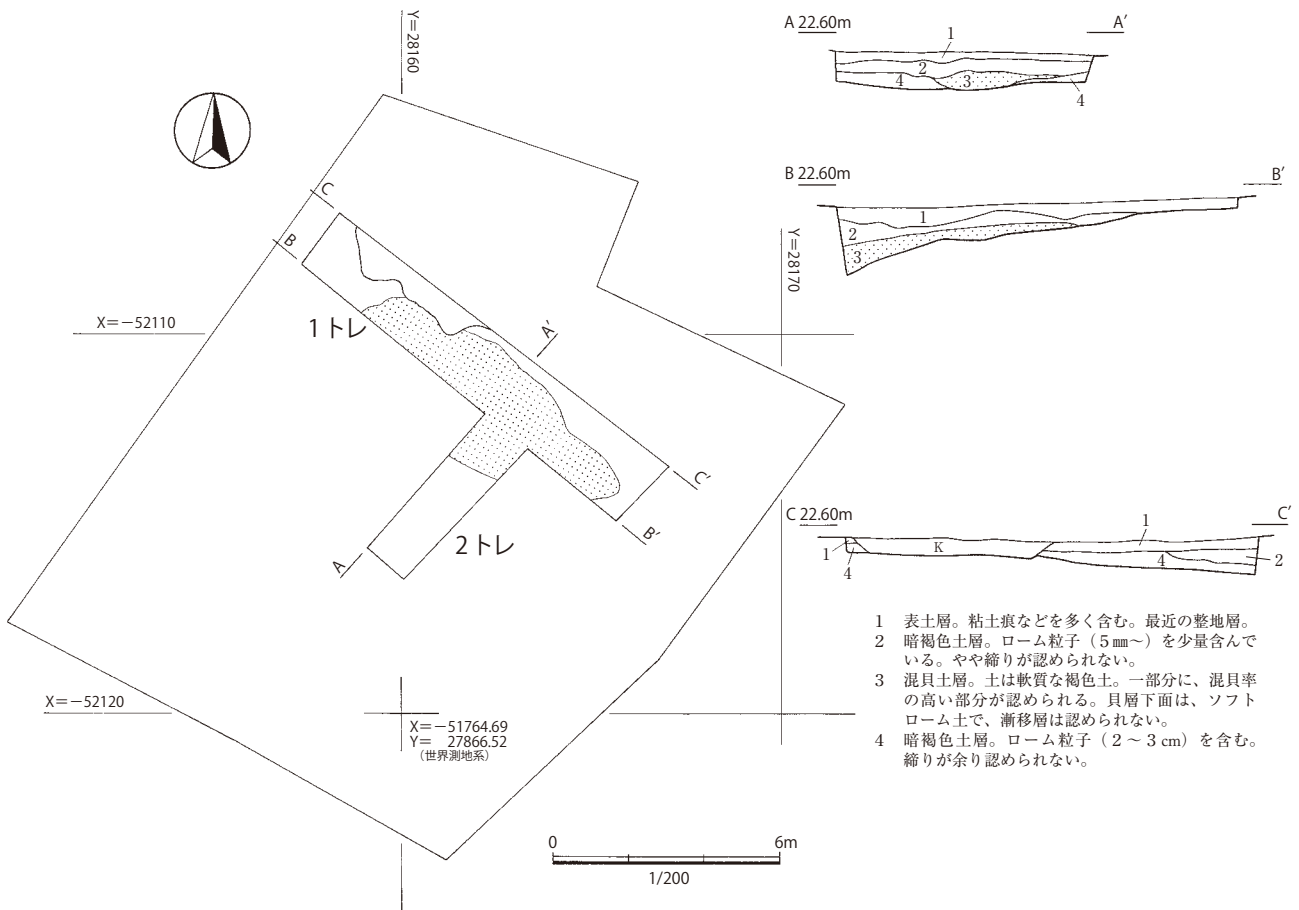
6 菊間遺跡群 宮ノ腰地区 (遺構：図版4 / 出土遺物：図版10)

遺跡の位置と周辺の調査状況 菊間遺跡群は、村田川の河口から南東に約2.5km入った左岸の、菊間台地上に所在している。標高は20～22m前後を計測する。台地の形状は、北東から南西に延びる略長方形を呈し、その規模は、南北約1.1km、東西約0.7～0.9mである。菊間遺跡群は、この台地上のほぼ全域にあつているが、台地北隅よりほぼ真南に向けて約600m程度の浸食谷が入り込んでおり、大きく二分している。以下、菊間遺跡群内の個々の遺跡を瞥見しておきたい。まず、縄文時代の貝塚（袖ヶ台貝塚・徳永貝塚・菊間貝塚）が東京湾岸に面した台地縁辺部に分布している。弥生時代の集落については、台地北側から中ほどにかけての平坦面で調査例（菊間遺跡・深道遺跡・鍛冶屋前遺跡・雲ノ境遺跡）が知られており、遺跡群では東側の台地上に広く分布していた可能性が伺える。

『先代旧事本紀』中の「国造本紀」にみえる久々麻国造（菊間国造）の墓城と目されている菊間古墳群は、この遺跡群内の北辺部に集中して展開しており、村田川流域並びに東京湾側低地部を眼下に見下ろすように配置されている。集落についても、この台地上に展開していたものと考えられる。律令国家体制下にあっても、菊間国造勢力の末裔がこの地を本貫地としていたことが想像される。中でも西側台地北端部に造営されたと考えられている菊間廃寺跡からは、上総国分寺創建瓦と同紋の単弁蓮華紋軒丸瓦などが表採されている。但し、廃寺を載せる台地の広がりから考えると、仏堂一宇程度の小規模寺院であろう。郷家は不詳である。今回の調査区は、菊間遺跡群西側台地の南西端部にあつており、東から入り込む谷の谷頭部に位置している。調査では、貝層の分布を把握したが、先に述べた縄文時代の貝塚の分布傾向と



第16図 菊間遺跡群宮ノ腰地区周辺地形図



第17図 菊間遺跡群宮ノ腰地区全体図、土層断面図

表5 菊間遺跡群 貝層サンプル基礎データ・内容物組成

層位	水洗前重量(g)	フレイ後残留物重量(g)				土壌重量(g)	混土率(%)	貝殻重量(g)	加外対象貝重量(g)	貝殻破砕率(%)
		10mm	4mm	1mm	計					
一括	130,650	11,330	8,250	6,270	25,850	104,800	80.2	25,831.4	11,569.4	55.2

層位	人工遺物		自然遺物								
	土器	炭化物	獣骨	魚骨	フジツボ	微小貝	炭化物	重量(g)			
一括	16	12.2	157	4.0	0	0	0	0	8	+	2.4

表6 菊間遺跡群貝類データ

貝種	個体数	比率%
イボキサゴ	8,607	78.8
アラムシロ	116	1.1
ウミナ	76	0.7
その他	2,124	19.4
計	10,923	100.0

その他内訳		
ハマグリ	939	44.2
アサリ	604	28.4
シオフキ	575	27.1
カガミガイ	3	0.1
マガキ	1	0.0
マテガイ	1	0.0
タニシ類	1	0.0

は、大きく異なった位置に形成されていることがわかる。

調査概要 調査は、個人住宅建設に先立って実施された確認調査ならびに一部本調査である。確認調査は、T字に配置したトレンチ（第17図）によって実施している。北西から南東方向に1トレンチ、北東から南西に2トレンチを設定

した。本調査の予定範囲は、1トレンチから調査対象地の北東隅にかけての範囲であったが、確認トレンチ内で貝層の分布が途切れることがわかったので、この範囲の貝層について調査を行った。

遺構と遺物 貝層は、台地縁辺の傾斜変換点より下側で、ソフトローム層直上に形成されていた。縦長の楕円形部分（トーンの範囲）を中心としており、広がり認められない。サンプル総重量756,550g（水洗前）のうち、130,650g（17.3%）について分析した（表5・6）。貝層形成の時期については共伴する遺物がなく不詳であった。貝類組成は、イボキサゴが約8割と目立っており、市内に多い縄文時代の貝層の特徴と近似するが、東側の谷津に面した貝塚は知られていない。

7 白船城跡 第8次 (遺構：図版5 / 出土遺物：図版7・10)

遺跡の位置と歴史的環境 白船城跡は、東京湾旧海岸線の八幡浦から南東に2.0kmに位置する、長さ430m、最大幅150mの独立台地を利用した城跡である。市原台地が海に面する縁辺部分であり、約6千年前の縄文海進時の海食崖とみられる。

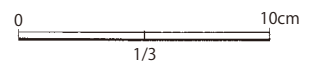
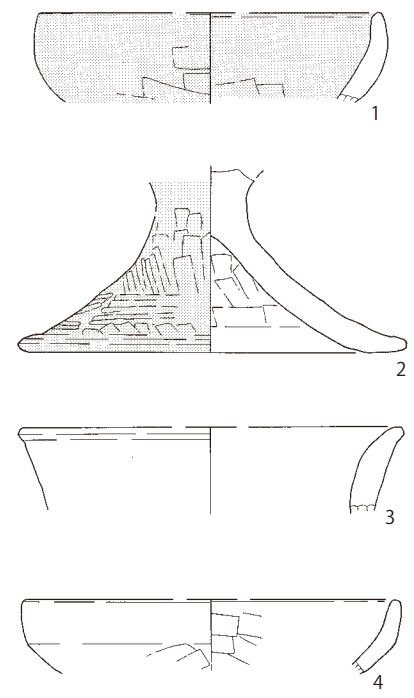
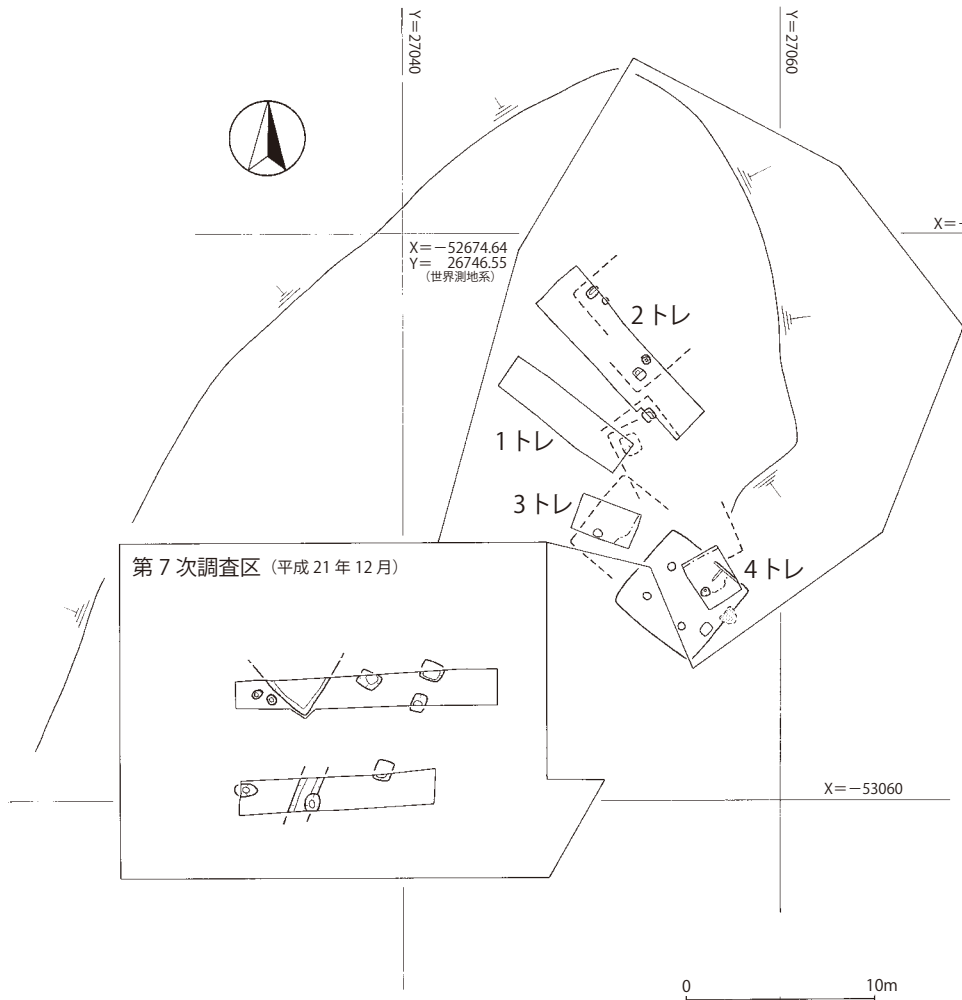
北西には弥生時代以降現代まで水田として活用されてきた市原条里制遺跡がひろがる。小支谷を隔てた南側台地には、市原城跡が知られる。部分的な調査によって土塁などが検出され、白船城跡と同じく戦国期の城とされる。また、この一帯は、光善寺廃寺・市原八幡神社などを包括し、上総国府推定地の最有力候補地として周知されているエリアでもある。

これまでの調査 白船城跡は、細長い台地上を3本の堀切で分割することによって4つの曲輪をつくり出す、直線的な連郭式の城郭とみられている。1次調査と2・3次調査は、曲輪部分で実施された。1次調査は弥生時代と平安時代の竪穴建物跡を調査し、中近世とみられる多数のピット跡や地下式坑、台地整形とみられる痕跡などを検出している(『白船城跡-第1次-』1987財団法人市原市文化財センター調査報告書第15集)。2・3次調査でも墓域や城郭関連とみられる土坑・ピット群を検出し、15世紀後半から16世紀にかけての陶磁器やカワラケ類が多く出土している。(『白船城跡II』1997同センター調査報告書第35集) その報告によれば、墓域の形成後、それを取り込む形で城郭の普請が行われており、築城主体と被葬者の繋がりを想定している。

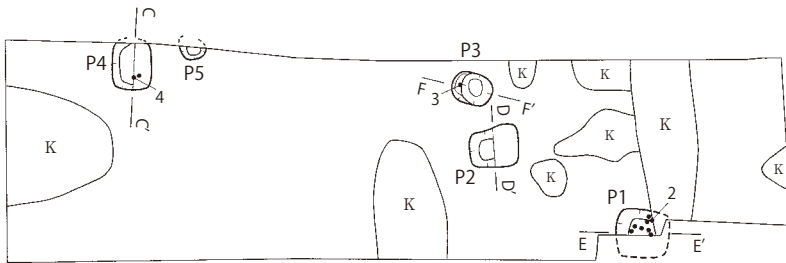
4・5次調査は斜面部分、6次調査は裾部分であり、造成の痕跡や小規模な溝跡などがみられた。7次調査は今回調査区の南西側隣接地であり、竪穴建物跡からカワラケが出土するなど、城跡の一部とみられる遺構が確認された(平成21年度ふるさと文化課直営調査・未報告)。



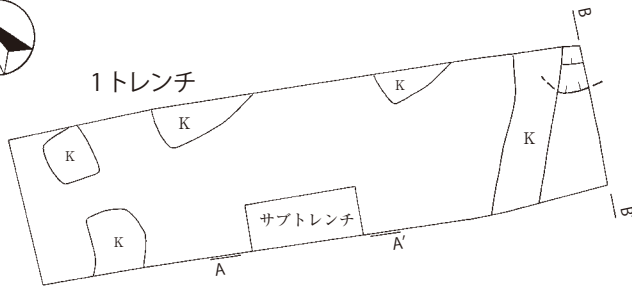
第18図 白船城跡周辺地形図



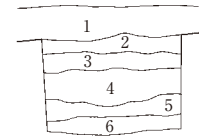
2トレンチ



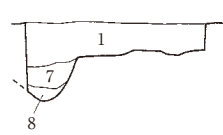
1トレンチ



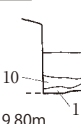
A 19.80m A'



B 19.80m B'



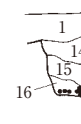
C 19.80m C'



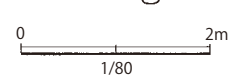
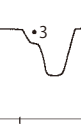
D 19.50m D'



E 19.80m E'



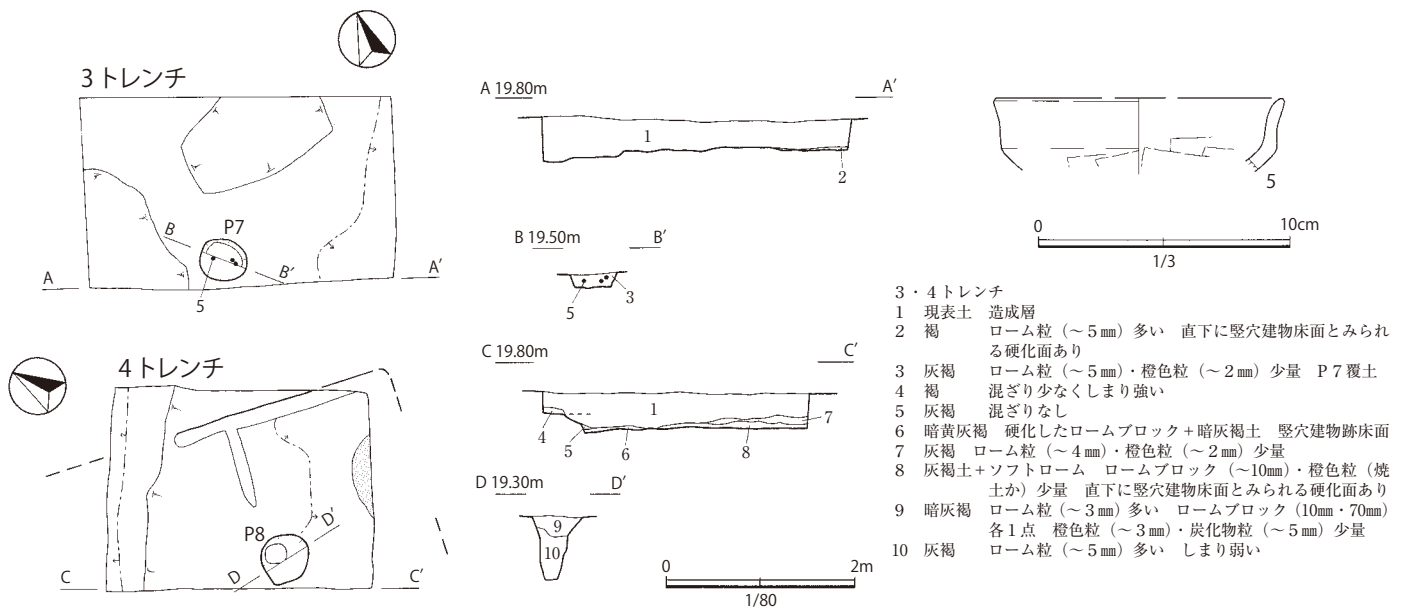
F 19.50m F'



1・2トレンチ

- 1 現表土 造成層
- 2 黄褐粘土 やや明色 関東ローム立川ローム層VI層AT層とみられる
- 3 暗黄褐粘土 同上VII層 第2黒色帯
- 4 黄褐粘土 2層よりにおい黄褐色 しまりかなり強い
- 2~4層は橙色粒・暗灰~黒色粒含む
- 5 暗黄褐粘土 2層よりやや明色 第1黒色帯 暗灰~黒色粒含む
- 6 黄灰褐粘土 ややボロボロしている
- 7 暗灰褐 ソフトロームまざる
- 8 暗灰褐 7層よりやや明色 ソフトローム多い
- 9 灰褐 ロームブロック (~70mm)・白色粘土粒 (~5mm) 多い 橙色粒 (~3mm) 少量
- 10 灰褐 ロームブロック (~20mm) 多い
- 11 黒灰 P4底面直上の土
- 12 暗灰褐 ロームブロック (~40mm) 多い
- 13 暗灰褐 ロームブロック (~10mm) 少量
- 14 暗灰褐 ロームブロック (~40mm) 多い 炭化物粒 (~2mm) 少量
- 15 暗灰褐 ロームブロック (~20mm) 多い 炭化物粒 (~2mm) 少量
- 16 暗灰褐 混ざり少ない P1底面土 遺物多く含む

第19図 白船城跡第8次全体図、1・2トレンチ実測図・出土遺物



第20図 3・4トレンチ実測図、3トレンチ出土遺物

調査の概要 住宅用倉庫建設に先立ち確認調査を実施した。建物基礎部分や斜面地などを除き、掘削が可能な部分において4カ所のトレンチ調査を入れたため、トレンチ配置にやや偏りが生じた。その結果、古墳時代後期の堅穴建物跡を部分的に確認した。貯蔵穴とみられる土坑や柱穴、硬化した床面などから推定し、7軒分の堅穴建物跡と推定され、当該期の集落跡とみられる。

調査区の地形 今回調査区は、第7次調査区の北東側近接地にあたる。部分的に近年の造成がなされ、残存する旧地形からみて最大深さ1.3mほどの削平を受け、地形が改変されている。現標高は19.6m前後であり、7次調査部分との標高はほぼ水平であるが、遺跡の確認面にはかなりの高低差がみられた。7次調査の堅穴建物跡が確認されたレベルは18.5m前後であり、今回調査区の遺構確認面（削平後残存レベル）は19.2~19.5m。その差は、削平状況も考えると1mをはるかに超える。したがって、旧来の地形は、7次調査区方面（南西方向）に傾斜する、もしくは明瞭な段差を作り出す状態を想定できる。7次調査の土層断面には、中世の台地整形痕跡とみられる状況も観察できることから、この落差は築城にあたっての地形改変の結果である可能性も高い。したがって、今回調査区は、この城跡において最も高い場所として、主郭など機能的に重要な部分を担う場所であったと考えられる。

遺構と遺物 調査区北西寄りに設定した1・2トレンチは、特に削平の影響を大きく受けており、ピットのみが残存していた。その覆土や形状から、堅穴建物跡の貯蔵穴及び柱穴とみられるが、堅穴の壁面や床面は検出されなかった。2トレンチのP1・P2・P4は平面形状が方形であり、貯蔵穴と考えられる。P1からは第19図2の高杯の脚部が出土しており、古墳時代後期の所産と考えられる。P3及びP5は柱穴とみられる。貯蔵穴が堅穴建物跡の隅部分に設置され、その脇の柱穴と想定される。

3トレンチは硬化面とピット1基（P7）の底面部分を確認した。第20図5の土師器の杯も古墳時代後期の須恵器模倣杯の特徴をもつ。4トレンチではレベルの異なる硬化面2面と壁周溝、柱穴、カマドが崩れたとみられる白色粘土および焼土跡を確認した。

主郭推定地であるものの、中世期の遺構はみられず、削平を受けて消滅した可能性が考えられる。しかし、前回までの7回にわたる調査で検出されていなかった古墳時代後期の6世紀から7世紀にかけての集落を確認し、白船城跡と呼ばれる独立台地上の、築城以前の新たな姿を見出すことができた。

8 市原城跡 辻地区 (遺構：図版5・6 / 出土遺物：図版11)

遺跡の位置 遺跡は市原台地北西側の端部に位置し、標高は約22m、低地との比高は約10mを測る。調査地は台地上の平坦部で、やや北に傾斜する変換部付近である。北側には能満川が南東から西側方向に流れており小谷を形成している。当地域は市原城跡として戦国末期の中世城郭の範囲であり、広いI郭の南側平坦部に相当する。能満川の谷を挟んで北向かい側の台地上には、15世紀から戦国末期にかけての遺構を伴う白船城跡が存在する。さらに、東側谷向かいには同様な時期で中世の国衙想定地等にも挙げられている能満城跡が位置している。また、調査地の北東側150m付近には光善寺廃寺跡が存在し上総国府付属寺院または定額寺ともいわれており、古い時期では三重圏縁四葉単弁蓮華文鏡瓦、凸面布目瓦なども出土する。当地域は上総国府推定地のひとつであり、当調査予定地は古代道の推定地に該当する場所であった。

調査内容 今回の調査は個人住宅の建て替えに伴う確認調査であり、165㎡のうち約10%にあたる17㎡を調査した。調査期間は、平成22年11月8日から15日までの実質6日間であった。

調査は、トレンチを2ヶ所設定し遺構の状況等を確認した。そのうちの第2トレンチから古代の掘立柱建物跡4棟、中世の掘立柱建物跡2棟を検出した。標準土層は、1：整地盛土（現代）、2：暗褐色土（近現代）、3：暗褐色土（中世面）、4：褐色土（古代面以前）、5：ロームブロックである。第1トレンチは約1.2mまで（3層中位面）掘り下げたが、崩落の恐れがあったため遺構検出面までは至らなかった。柱穴確認面や覆土の観察から、SB01から04は古代、SB05と06が中世の所産と考えられる。掘立柱建物跡SB01は第2トレンチの中央東側に柱穴1本のプランを約2/3を確認した。掘り方は隅円長方形と推定される。

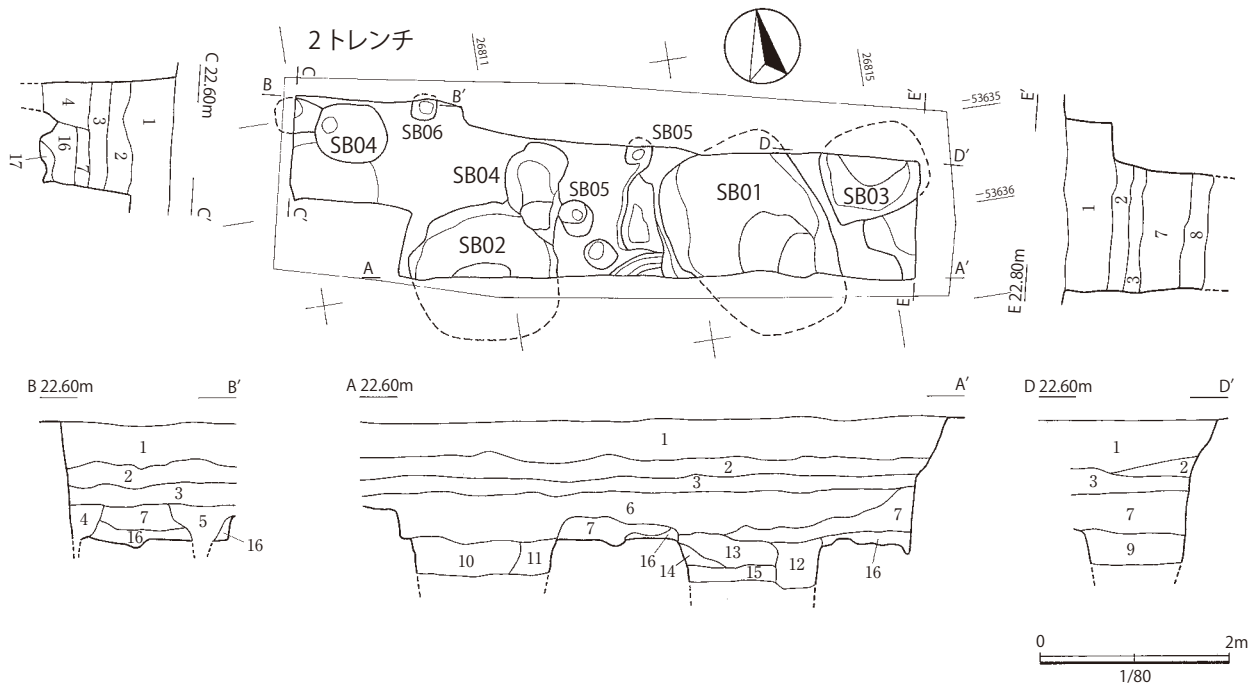
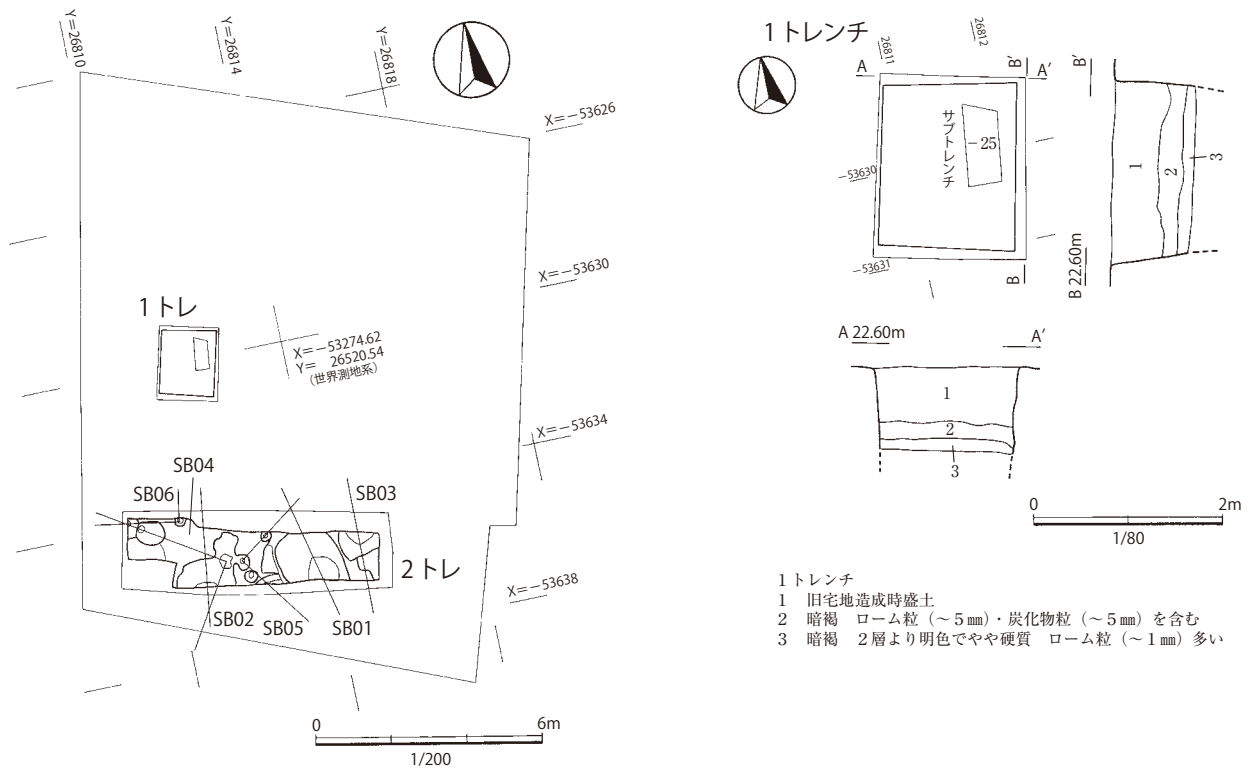


(市原市基本図1 / 2500、昭和55年測図より)

0 200m
(1 / 5,000)

第21図 市原城跡辻地区周辺地形図

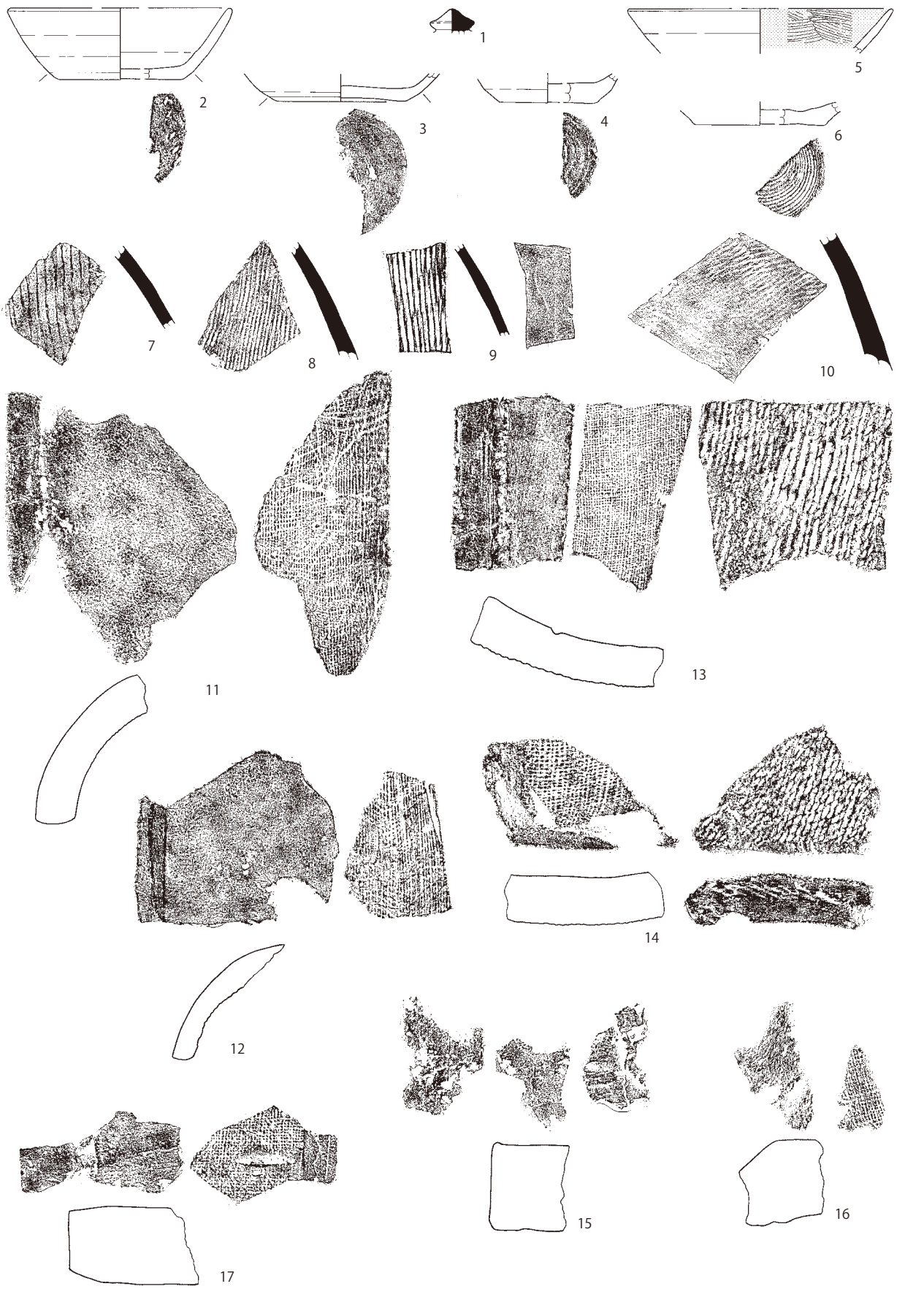
る。南東側に土層の違いが見られるが、柱の抜き取り痕跡の可能性が高い。大きさは長軸2.14m、短軸1.49m、深さはプラン確認面から約0.6m下げているが、ボーリング棒では底部まで更に1.10m下がる。主軸方位はN-12°-Wを測る。SB02は第2トレンチの中央西側に柱穴1本のプランを約1/2を確認した。掘り方は隅円長方形と推定される。南側中央に土層の違いが見られるが、柱の抜き取り痕跡の可能性が高い。大きさは長軸1.52m、短軸1.31m、深さはプラン確認面から0.7m下げているが、



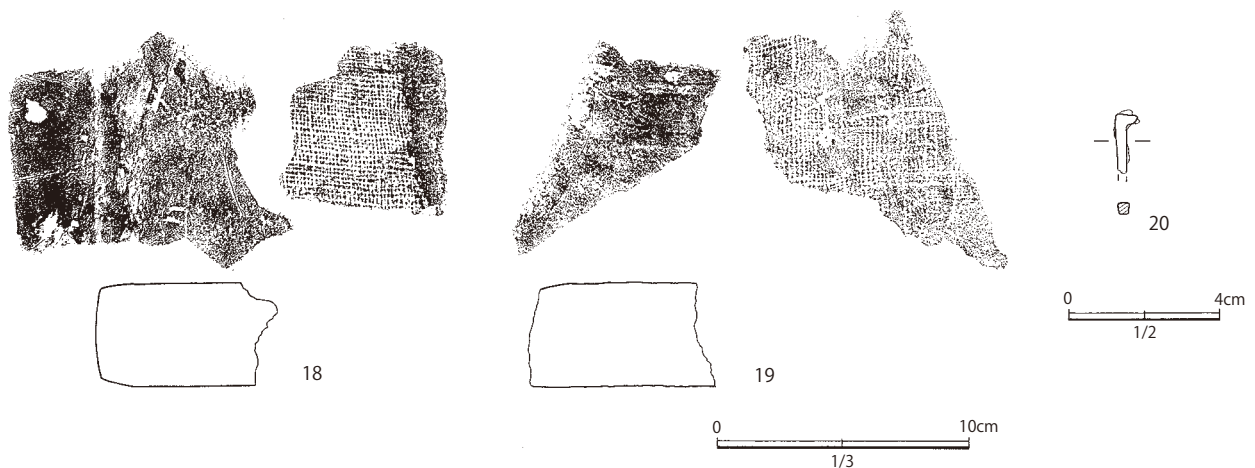
- 2トレ
- 1 旧宅地造成時盛土
2 暗褐 ローム粒 (~5mm)・炭化物粒 (~5mm) を含む
3 暗褐 2層より明色でやや硬質 ローム粒 (~1mm) 多い
4 暗褐 暗色で軟質 木炭・焼土粒を含む
5 褐 軟質 ロームブロック・炭化物粒を含む
6 黒褐 やや軟質 ローム粒 (~5mm)・炭化物粒 (~5mm) を含む
7 暗褐 硬質 ローム粒 (~1mm) 含む
8 褐 やや硬質 ロームブロック・粘土ブロックを多く含む
9 暗褐 やや硬質 ロームブロック (~10mm)・炭化物粒 (~5mm) 少量
10 褐 ロームブロック・粘土ブロック・木炭粒を少量含む
11 暗褐 ロームブロック多い 木炭粒少量
12 灰褐 白色粘土ブロック微量
13 灰褐 ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
14 褐 ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
15 褐 ロームブロック・白色粘土ブロック多い
16 褐 ロームブロック多い
17 ロームブロック



第22図 市原城跡辻地区全体図、1・2トレンチ実測図



第23図 2トレンチ出土遺物(1)



第24図 2トレンチ出土遺物(2)

ボーリング棒では底部まで更に1.10m下がる。主軸方位はN-8°-Eを計る。SB03は第2トレンチの北東隅に柱穴1本のプランを約2/3を確認した。掘り方は隅円長方形と推定される。北側に土層の違いが見られるが、柱の抜き取り痕跡と思われる。大きさは長軸1.12m、短軸0.95m、深さはプラン確認面から0.3m下げているが、ボーリング棒では底部まで更に0.3m下がる。主軸方位はN-9°-Wを計る。SB04は北西側に2本検出され、掘り方プランは長円形でP1が長径1.02m、短径0.59m、P2が長径0.78m、短径0.61mを測る。柱間隔柱心点間で1.12mである。主軸方位はN-9°-Eを示す。SB05は中世と考えられ、素掘りの掘立柱である。トレンチの中央に存在し、P3が円形で径0.28m、P4が長円形で長径0.40m、短径0.35mを計る。柱間隔は0.90mである。主軸方位はN-30°-Wを示す。SB06はトレンチの北西隅に存在し、掘り方はほぼ円形でP5が径0.28m、P6が径0.35mを計る。柱間隔は約1.50mである。主軸方位はN-9°-Eを示す。

出土遺物は、各トレンチから土師器・須恵器・瓦などが出土している。主な遺物は、すべて第2トレンチからで、1はSB03覆土上層から須恵器杯蓋の鈕部分である。形体はやや扁平で径2.4cm、色調は灰色で、焼成は普通、胎土は緻密である。2は土師器杯でSB03覆土上層からの出土で約1/5の残存。底部径6.7cm、口径12.2cm、器高3.9cmで、いわゆる箱型である。底部は静止ヘラ削り、色調は両面淡褐色、胎土は緻密、焼成はやや不良である。3は土師器杯でSB03覆土上層からの出土で底部付近のみ1/2弱の残存。底部径6.9cmと推定される。底部は右回転ロクロ、ヘラ切り離し、色調は両面淡褐色、胎土は緻密、焼成はやや不良である。4は土師器杯でSB03覆土上層からの出土で底部付近のみ約1/3の残存。底部径5.3cmと推定される。底部は右回転ロクロ、ヘラ切り離し、色調は両面淡褐色、胎土は緻密、焼成はやや不良である。5は土師器杯でSB03覆土上層からの出土で口縁部のみ約1/6の残存。口径14.6cmと推定される。色調は外面暗褐色、内面黒色、胎土は緻密、焼成は普通である。内面はいわゆる内黒で横方向のヘラミガキが施されている。6は土師器杯でSB03覆土上層からの出土で底部付近のみ約1/2の残存。底部径7.2cmと推定される。底部は右回転ロクロ、糸切り離し、色調は両面淡褐色、胎土は緻密、焼成はやや不良である。7から10は須恵器甕の胴部小片で、7は外面が平行タタキ、内面はナデ調整、色調は外面が茶褐色、内面は淡褐色、胎土には鉄分(1mm以下)を含む。焼成はやや不良。いわゆる十分な還元焼成をなされていない須恵器。器厚は6.5mm。8は外面が細めの平行タタキ、内面はナデ調整、色調は両面淡灰色、胎土は緻密、焼成は普通、器厚は6~9mm。9の外面は細めの平行タタキ、内面はナデ調整、色調は両面暗灰色、胎土は

緻密。焼成は良好。器厚は少し薄く6mm前後。10は外面が平行タタキ、内面はナデ調整、色調は両面灰色、胎土には鉄分(1mm以下)を含む。焼成は良好。11と12は丸瓦片で約1/6の残存、内側凹面に布目、外側凸面はナデ、11は厚さ2.3cm、端部はヘラケズリ、色調は両面暗褐色、焼成は少し不良、酸化焰焼成。12は厚さ1.2~1.5cmで少し薄い、端部はヘラケズリ。色調は両面淡褐色、胎土は緻密、焼成は少し不良、酸化焰焼成。13と14は平瓦片で外側凹面に布目、内側凸面は縄目、端部はヘラケズリ、13は約1/6の残存、厚さ2.1~2.6cm、色調は両面淡褐色、焼成は良好、端部はヘラケズリ、還元焰焼成。14は約1/8の残存、厚さ2.5cm、色調は外面黒色、内面淡褐色、焼成は少し不良、端部はヘラケズリ、酸化焰焼成。15~19は甎の小片で、胎土は緻密、内側に布目、外側はナデ、端部はヘラケズリ後ナデ、15は端部分で厚さ4.6cm、色調は灰褐色、焼成は普通、酸化焰焼成。16は端部分で厚さ4.3cm、色調は灰褐色、焼成は普通、還元焰焼成。17は端部分で厚さ4.3cm、色調は灰褐色、焼成はやや不良、酸化焰焼成。18は端部分で厚さ4.1cm、色調は淡灰褐色、焼成はやや不良、還元焰焼成。19は端部分で厚さ4.1cm、色調は灰褐色、焼成は良好、還元焰焼成。20は鉄釘で小型2mmの方形の折釘である。先端部は欠損し約1/2の残存、SB02覆土上部からの出土。

調査の結果 以上のように掘立柱建物を古代4棟、中世2棟確認した。古代の掘立柱建物跡は土層観察や出土遺物及び掘り方の主軸方位などから4時期が想定される。特にSB01と02は掘り方が大きく、最も古いものはSB01で掘り方の規模も長軸2.14mと最大である。深さも底部まで1.70mと推定される。SB03と04は小規模でSB04は2本検出された。これらからの出土遺物は須恵器甕片、土師器杯片とともに瓦片が比較的多く出土し総量は4,814gである。中でも甎は小片であるが、5個(1,140g)と調査の規模に比較して多い。特に裏面に布目があるものは上総国分寺跡でもみられるが出土量は少なく(注1)、当遺跡では他の瓦の量に比較して顕著である。また、凸面布目瓦は出土しなかった。SB05と06は中世の素掘りの建物であり、いずれも2本ずつ検出した。なお、中世とみられる遺物は出土していない。

今回の調査は範囲が狭いため、各棟の全体規模などは推測の域を出ていないが、古代の規模の大きい掘立柱建物跡の検出は甎の出土とともに、当地が上総国府推定地のひとつとして挙げられているため、その関連遺構の可能性を推測されるものである。また、中世の掘立柱建物跡は土層観察から時期を推定したが、出土遺物が無いものの市原城跡の関連遺構とみられる。当城跡の建物跡とすれば初の発見でもある。なお、SB01以外は覆土に木炭粒(一部に焼土粒も)を含んでおり火災関連遺構の可能性はある。

注釈1 宮本敬一氏ご教示

参考文献

- 大川 清「上総光善寺廃寺」『古代24号』1975など
宮本敬一『市原の遺跡(1)史跡上総国分寺跡-国分僧尼寺とその時代』1986 市原市教育委員会
高橋康男『市原市上総国府推定地確認調査報告書(1)』1994 (財)市原市文化財センター、市原市教育委員会
櫻井敦史『白船城跡Ⅱ』1997 (財)市原市文化財センター
田中清美『市原市 市原城郭跡』1998 (財)市原市文化財センター
田所 真「幻の上総国府を求めて 安房国・上総国」『幻の国府を掘る 東国の歩みから』1999 雄山閣出版
宮本敬一「四、忘れられた社寺・守公神と神主院」『歴史散歩資料市原市郡本周辺の遺跡と文化財』1999 市原地方史研究連絡協議会
木下 良「1. 上総国府の調査」『上総国府推定地歴史地理学的調査報告書』1999 市原市教育委員会

9 出土遺物観察表 (計測単位はcm)

郡本遺跡群 第14次

図号 番号	遺物 番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径 残存	底径	底径 残存	最大径	器高	胎土 含有物	焼成	色調	調整	その他
4	1	3トレ	SD02	弥生土器	壺							石灰質、黒色砂粒多い	良好	橙褐色→明褐色	内面横方向ミガキ、口蓋部折返し、外面に一条の凹線あり	
4	2	3トレ		須恵器	壺							含有物不詳	硬質	灰色	ロクロ成形	蓋短部のみ/水田・不入窯産または東海系
4	3	本		須恵器	高台付杯			(8.5)	1/8			含有物不詳	硬質	灰色	ロクロ成形	小片/底部突出型杯、東海系須恵器
4	4	3トレ		土師器	鉢	(18.2)	小片					赤色粒、白色微粒含む	硬質	橙褐色	粘土粗積上げ回転台成形/内面横方向ミガキ/外面横方向タタキ	鉢鉢か、丁寧な通り
4	5	本	S01	土師器	杯	(13.5)	1/8	6.4	1/2強		3.4	雲母粒少々、黒色砂粒若干、石灰質含む	良好	赤褐色	ロクロ成形/外面底部下向き手持ヘラケズリ整形/底部回転糸切り後手持ヘラケズリ整形	打明皿使用の可能性あり
4	6	本	S01	土師器	杯	(12.8)	1/8	4.5	1/2		4.0	雲母粒多い、赤褐色粒、白色粒少量、砂粒稀に入る	良好	褐色	ロクロ成形/外面底部下向き手持ヘラケズリ整形/底部回転糸切り後手持ヘラケズリ整形	
4	7	本	S01	土師器	杯	12.7	3/5	4.6	1/1		(4.4)	雲母粒多い、赤褐色粒、白色粒少量、砂粒稀に入る	良好	褐色	ロクロ成形/外面底部下向き手持ヘラケズリ整形/底部回転糸切り後手持ヘラケズリ整形	
4	8	本	S01	土師器	杯	15.8 ~17.0	1/3	4.2	1/2		4.0	石灰質、黒色砂粒、赤褐色粒、白色微粒若干	良好	褐色→橙褐色	ロクロ成形/外面底部下向き手持ヘラケズリ整形/底部一定方向手持ヘラケズリ	
4	9	本	土師器	杯		(11.9)	1/5	5.3	1/1		3.2	雲母粒 (~0.5mm)、白色微粒少量	軟質	黒色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ	20と胎土、焼成、色調類似
4	10	本	S01	土師器	高台付杯	(12.8)	1/8	6.2	1/4		5.6	雲母粒多い、赤褐色粒 (~1.0mm)、白色微粒含む	良好	橙灰→黒色	ロクロ成形/高台部貼り付け/内面ヘラミガキ黒色処理/三角高台	内黒、什器
4	11	3トレ		灰陶陶器	不詳							灰白色、緻密/白色粒 (~1.0mm) 少量	硬質	灰白色	内面ツケガケ	小片/高台付鉢の可能性あり
4	12	本	土師器	壺			(17.9)	1/4				雲母粒若干	軟質	灰褐色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整	小片
4	13	本	土師器	杯			5.6	1/1強				雲母粒 (~0.5mm) 多い	硬質	暗褐色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ	16と胎土、色調類似
4	14	本	SD01	土師器	杯		6.0	1/1				稀に白色微粒が観察される	良好	黄土色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/円柱技法	15と胎土、焼成、色調類似
4	15	本	SD01	土師器	杯		(6.7)	1/3				稀に白色微粒が観察される	良好	黄土色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/円柱技法	14と胎土、焼成、色調類似
4	16	本	土師器	杯			(4.8)	1/4				雲母粒 (~0.5mm) 多い	硬質	暗褐色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ	13と胎土、焼成、色調類似
4	17	本	土師器	杯			(5.4)	1/2				雲母粒 (~0.5mm)、白色微粒少量	軟質	黒色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ	20と胎土、焼成、色調類似
4	18	本	SD01	カワラケ	小皿		5.0	1/1強				雲母、黒色砂粒 (~0.5mm) 多い	良好	褐色	ロクロ成形/底部静止糸切り後無調整/円柱技法	25と類似 ミコミに切離しの糸痕跡残る
4	19	3トレ	土師器	杯			(5.0)	1/3				雲母粒 (~0.5mm)、白色微粒少量	軟質	黒色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ	20と同様の胎土
4	20	3トレ	土師器	杯			5.5	1/1				雲母粒 (~0.5mm)、白色微粒少量	軟質	黒色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ミコミ横ナデ	
4	21	本	SD01	カワラケ	小皿		(9.6)	1/12			1.7	雲母粒稀に入る、他は混入物不詳	軟質	白褐色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ	22と胎土、焼成、色調類似
4	22	3トレ	SD01	カワラケ	小皿		(8.2)	1/4			1.4	雲母粒稀に入る、他は混入物不詳	軟質	白褐色	ロクロ成形/底部静止糸切り後無調整/内面ロクロナデ	21と胎土、焼成、色調類似
4	23	3トレ	SD01	カワラケ	小皿		(7.5)	1/12			1.4	雲母粒 (~0.5mm)、白色微粒少量	軟質	黒色	ロクロ成形/底部静止糸切り後無調整/内面ロクロナデ	20と胎土、焼成、色調類似
4	24	3トレ	SD01	カワラケ	小皿			4.4	1/1			雲母粒、黒色砂粒 (~0.5mm) 多い、白色粒、白色針状物含む	良好	明褐色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ/底部円柱技法	中世
4	25	3トレ	SD01	カワラケ	小皿		(9.8)	1/10			1.8	雲母粒、黒色砂粒 (~0.5mm) 多い	良好	褐色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ	小片/24と胎土近似
4	26	3トレ	SD01	カワラケ	小皿			(7.6)	1/4			雲母粒 (~0.5mm)、白色微粒少量	軟質	黒色	ロクロ成形/底部回転糸切り後無調整/内面ロクロナデ	23と胎土、焼成、色調類似
4	27	3トレ		常滑産陶器	梅か			(4.8)	1/3			胎土白色、堅緻	硬質	白灰色	ロクロ成形/付け高台/梅輪ツケガケ (内面のみ)	
4	28	本	SD01	磁器	鉢鉢か			(5.4)	1/4			胎土灰色	硬質	白灰色	削り出し高台/内面無飾	青磁
4	29	3トレ	SD01	常滑産陶器	握ね鉢							砂粒 (~0.5mm)、石灰質多い	硬質	明褐色→褐色	内外面ロクロナデ	底部の一部のみ/中世

海士遺跡群久保畑地区

図号 番号	遺物 番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径 残存	底径	底径 残存	最大径	器高	胎土 含有物	焼成	色調	調整	その他
6	1	1トレ	S03	須恵器	壺							赤褐色→明褐色、緻密/砂粒 (~0.5mm)、赤色粒 (~0.5mm)、白色粒 (~0.5mm)、石灰質	良好	茶褐色	外周胴部平行タタキ/内面ナデ	千葉産
8	2	本	S01	土師器	埴	(7.0)	1/4	2.6	1/1	7.5	4.9	砂粒 (~0.5mm)、石灰質、骨針少量	良好	赤彩	外周口縁部ハナナデ後、一部ナデ跡、胴部ヘラケズリ/内面口縁部ハナナデ胴部ヘラナデ 内外面赤彩	古墳時代前期
8	3	本	S01	土師器	埴か							赤色粒 (~0.5mm)、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	橙褐色	外周ハナナデ/内面ナデ胴部付直ヘラケズリ	古墳前期
8	4	本	S01	土師器	壺	12.4	1/2			14.8		赤色粒 (~1.5mm)、雲母多量、骨針少量	やや甘い	明褐色	外周口縁部→頸部ナデ、胴部ヘラケズリ/内面口縁部→胴部ナデ、胴部ヘラナデ	
8	5	本	S01	土師器	壺	(22.4)	1/4					雲母多量、赤色粒 (~1.5mm)、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	褐色→暗褐色	外周口縁部→頸部ナデ、胴部ヘラケズリ/内面口縁部→胴部ナデ、胴部ヘラナデ	
8	6	本	S01	土師器	壺	(21.8)	1/8					砂粒 (~1.0mm)、石灰質多い、骨針少量	良好	明褐色	外周口縁部→頸部ナデ、胴部ヘラケズリ/内面口縁部→胴部ナデ、胴部ヘラナデ	
8	7	本	S01	土師器	台付壺			9.7	2/3			赤色粒 (~1.5mm)、白色粒 (~0.5mm) 多い、骨針少量	良好	暗褐色→明褐色	外周胴部ヘラケズリ、胴部下端→胴部傾斜整形/内面胴部ヘラナデ、脚部ヘラケズリ、底先端を削整形	内面にスス付着

種別 番号	遺物 番号	遺構 番号	種類	口径	口径 残存	底径	底径 残存	最大径	器高	胎土 含有物	焼成	色調	調整	その他
8	8	本	土師器	杯	1/6	6.8	1/2	3.8	3.8	砂粒 (~2.0mm) 多い、赤色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	橙~緑	ロク成形/体部下端~底部回転ヘラケズリ	
8	9	本	土師器	杯	1/6	(8.8)	1/8	3.9	3.9	赤色粒 (~0.5mm) 多い、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	やや甘い	橙~明褐	外面体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリか/内面ヘラナナ	
9	10	本	土師器	杯	3/4	6.6	3/4	4.1	4.1	白色粒 (~0.5mm) 多い、赤色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	橙~明褐	ロク成形/体部下端~底部手持ヘラケズリ、その後底面に環状のヘラ抜き	
9	11	本	須恵器	杯	3/4	8.2	4/5	4.1	4.1	灰褐色・緑色/白色粒 (~0.5mm) 多い、砂粒 (~0.5mm) 少量	良好	明灰	ロク成形/体部下端~底部手持ヘラケズリ	千葉産・南河原窯か
9	12	本	須恵器	杯		(7.8)	1/4			灰~灰褐色、やや粗い/白色粒 (~1.5mm)、白色粒 (~1.0mm) 多い	甘い	灰	ロク成形/外面体部下端~底部手持ヘラケズリ	千葉産か
9	13	本	須恵器	壺						黄灰色、やや粗い/砂粒 (~1.5mm)、白色粒 (~1.0mm) 多い、石灰少量	明褐	明褐	外面平行タタキ/内面ナナ	千葉産
9	14	本	須恵器	壺		13.8	1/3			橙~暗褐色・緑色/白色粒 (~1.0mm) 多い、石灰少量	良好	橙~暗褐	外面体部~底部ヘラケズリ/内面ヘラナナ	千葉産
9	15	本	須恵器	壺	1/2	11.4	1/1	22.1	29.4	赤褐色・緑色・黒色/白色粒 (~1.0mm) 多量、砂粒 (~1.0mm)、骨針少量	良好	黒褐	外面体部~頸部口ロナナ・外面体部下端ヘラケズリ/内面口縁部~頸部ナナ・口縁部をナナ	千葉産
9	16	本	須恵器	杯	1/3	8.6	1/2	3.2	3.2	明灰色・緑色/白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	明灰	ロク成形/外面体部下端~底部回転ヘラケズリ	水田II後半期
9	17	本	須恵器	杯	1/5	(10.6)	1/4	3.2	3.2	明灰色・緑色/白色粒 (~0.5mm) 多い、骨針少量	良好	灰~明灰	ロク成形/外面体部下端~底部回転ヘラケズリ	水田II後半期
9	18	本	土師器	杯	1/4	(9.4)	1/4	4.8	4.8	白色粒 (~1.0mm) 多い、赤色粒 (~0.5mm) 少量	良好	橙	外面体部ヘラケズリ後体部ヘラケズリの後、口縁部をナナ/内面ヘラナナ	
9	19	本	土師器	壺	1/6	(13.0)	1/6			石灰多い、白色粒 (~1.0mm) 多い、赤色粒 (~1.0mm)、石灰少量	良好	暗赤褐~暗褐	外面口縁部~頸部ナナ・体部~底部ヘラケズリ/内面ヘラナナ (縁部に底が付くナナ)	
9	20	本	土師器	杯	1/3	5.4	3/4	4.5	4.5	白色粒 (~0.5mm) 多い、赤色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	橙~暗褐	外面体部ヘラケズリ/内面ヘラナナ	19と同一個体底部の可能性あり
9	21	本	土師器	壺		5.0	1/1			石灰多い、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	明褐	外面体部ヘラケズリ/内面ヘラナナ	外面に三角が巡る 仏墓など特殊用途か
9	22	本	土師器	杯か		(7.0)	1/3			骨母多い、赤色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	明褐~明橙	外面口ロナナ/外面体部回転ヘラケズリ	
9	23	本	土師器	杯	1/6	(12.8)	1/6			骨母多い、骨針少量	良好	明褐	外面口ロナナ/外面体部回転ヘラケズリ	
9	24	本	土師器	手づくね						白色粒 (~0.5mm)、石灰・骨針少量	良好	橙	指成形/胴部に直径2mmの孔が貫通する	古墳時代か
9	28	2トレ	土師器	楕か		4.8	3/4			白色粒 (~0.5mm) 多い、赤色粒 (~1.0mm)、骨母・骨針少量	良好	橙	外面口ロナナ/外面体部回転ヘラケズリ	
9	32	本	弥生土器	蓋						褐色粒 (~1.0mm) 多い、白色粒 (~0.5mm) 少量	良好	明褐	外面ヘラミミガキ後縁部文・斜線文を施文し赤形	弥生後期
9	33	本	弥生土器	蓋か						白色粒 (~1.0mm) 多い、白色粒 (~0.5mm) 多量	良好	明褐	外面に結節文・羽状線文を施文	弥生後期
9	34	本	土師器	壺						白色粒 (~0.5mm)、石灰・骨針少量	良好	褐	内外面口縁部ハケナナ後口唇をナナ	古墳前期

山新遺跡第6地点

種別 番号	遺物 番号	遺構 番号	種類	口径	口径 残存	底径	底径 残存	最大径	器高	胎土 含有物	焼成	色調	調整	その他
13	1	1トレ	土師器	高杯						石灰多い、砂粒 (~2.0mm)、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	明褐~橙	外面ヘラケズリ後底面平らナナ、尖帯直下をナナ/内面ハケナナ後ヘラナナ消し	尖帯接着面に細かく密な刻線を施す
13	2	1トレ	土師器	高杯						砂粒 (~2.0mm) 多い、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	明橙	外面ヘラケズリ	底面に粘土紐巻き上げの接着部分が観察できる
13	4	1トレ	土師器	高杯	1/1	16.2	1/1			砂粒 (~0.5mm) 多い、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	赤橙	外面ヘラケズリ後ナナ/内面ナナ	杯部のみ
13	5	サブトレ	土師器	高杯						石灰多い、砂粒 (~2.0mm)、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	橙~暗褐	外面ヘラケズリ後ナナ/内面ナナ	脚部のみ
13	6	本	土師器	手づくね						砂粒 (~0.5mm) 多い、赤褐色粒 (~0.5mm)、石灰少量	良好	明褐	指成形	脚部か

山新遺跡第7地点

種別 番号	遺物 番号	遺構 番号	種類	口径	口径 残存	底径	底径 残存	最大径	器高	胎土 含有物	焼成	色調	調整	その他
15	1	1トレ	土師器	転形別口	1/1	(8.3)	1/2	8.6		白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	明褐	外面ヘラケズリ/内面ナナ	土師器台付裏面をフノゴの羽口に転用か 縁部で一部泥質 市内最古の意匠的遺物か
15	2	1トレ	土師器	高杯						赤色粒 (~1.0mm) 多い、白色粒 (~0.5mm)、石灰多い、骨針少量	良好	橙~橙	外面縦方向ヘラケズリ後ヨコナナ、まはらに縦方向のヘラミミガキ/内面ナナ・輪 積み痕が残る	
15	3	1トレ	土師器	壺	1/4	(18.4)	1/4			石灰多い、白色粒 (~0.5mm)、骨針少量	良好	明橙	外面口縁部~頸部ナナ・外面口縁部~頸部ナナ	外面にスス付着

白船城跡第8次

種別 番号	遺物 番号	遺構 番号	種類	口径	口径 残存	底径	底径 残存	最大径	器高	胎土 含有物	焼成	色調	調整	その他
19	1	1トレ	土師器	杯	1/5	(13.6)	1/5			赤色粒 (~1.0mm) 多い、白色粒 (~0.5mm) 少量	甘い	明橙	外面口縁部ナナ・体部ヘラケズリ/内面ナナ	内外面赤形
19	2	2トレ	土師器	高杯		15.4	3/4			赤色粒 (~2.0mm) 多い、骨母・骨針少量	良好	明褐~明橙	外面ヘラケズリ後ヘラミミガキ/脚部内面上半ヘラケズリ下半ナナ	
19	3	2トレ	土師器	壺	1/5	(15.0)	1/5			白色粒 (~0.5mm)、骨母・骨針少量	良好	明橙	外面ナナ/内面ナナ	
19	4	2トレ	土師器	杯	1/12	(14.6)	1/12			赤色粒、白色粒 (~0.5mm)、骨母・骨針少量	良好	明橙	外面口縁部ナナ・体部ヘラケズリ/内面ナナ	
20	5	3トレ	土師器	杯	1/6	(11.4)	1/6			白色粒 (~0.5mm) 多い、石灰少量	やや甘い	赤橙	外面口縁部ナナ・体部ヘラケズリ/内面ナナ	



郡本14次 1トレンチ確認状況 東から



郡本14次 2トレンチ確認状況 北から



郡本14次 3トレンチSD01確認状況 北から



郡本14次 3トレンチ南端部SD02確認状況 南西から



郡本14次 4トレンチSD01確認状況 北から



郡本14次 SD01・SD02(左端)土層断面 東から



郡本14次 本調査範囲全域 北西から



郡本14次 SI01カマド確認状況 北西から



海士遺跡群 調査風景 南西から



海士遺跡群 1トレンチSI03確認状況 南から



海士遺跡群 SI01確認面・貝層検出状況 南東から



海士遺跡群 SI01貝層断面 南から



海士遺跡群 SI01 南東から



海士遺跡群 SI02遺物出土状況 北西から



海士遺跡群 SI02 南から



海士遺跡群 SI02・SI01(左奥) 北から



山新第6地点 トレンチ全景 南西から



山新第6地点 調査風景 南から



山新第6地点 遺物出土状況 北東から



山新第6地点 本調査部分 南西から



山新第7地点 調査風景 北東から



山新第7地点 1トレンチ確認面 北から



山新第7地点 1トレンチSI01遺物出土状況 西から



山新第7地点 2トレンチ貝層検出状況 南から



山新第7地点 2トレンチ古墳周溝土層断面 南東から



山新第7地点 3トレンチ 南から



菊間遺跡群 調査風景



菊間遺跡群 1トレンチ北側確認状況 南から



菊間遺跡群 2トレンチ西側確認状況 北から



菊間遺跡群 貝層範囲確認状況 東から



菊間遺跡群 貝層範囲確認状況 北から



菊間遺跡群 1トレンチ貝層南端堆積状況 北から



白船8次 調査風景 北西から



白船8次 1トレンチ 北から



白船8次 2トレンチP1断面 北東から



白船8次 2トレンチP3(手前)・P2 北から



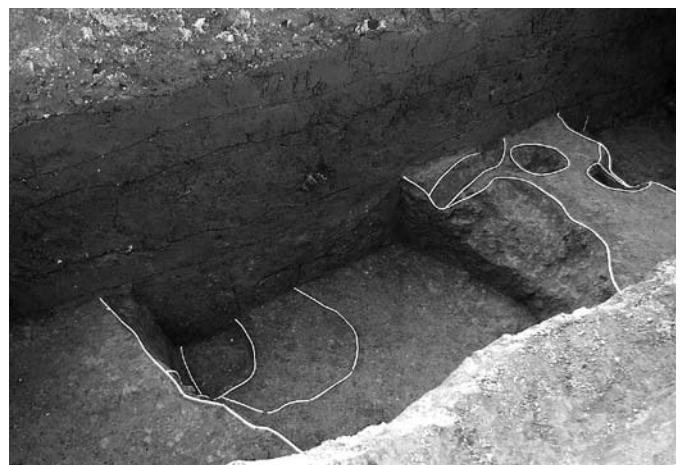
白船8次 3トレンチP7 北東から



白船8次 4トレンチ 東から



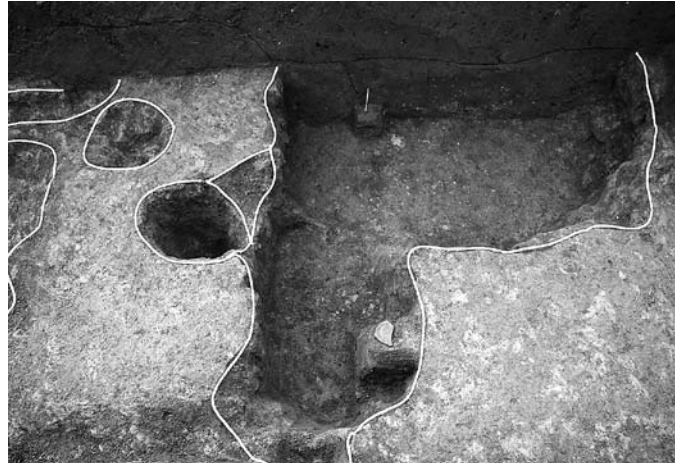
市原城跡 1トレンチ 西から



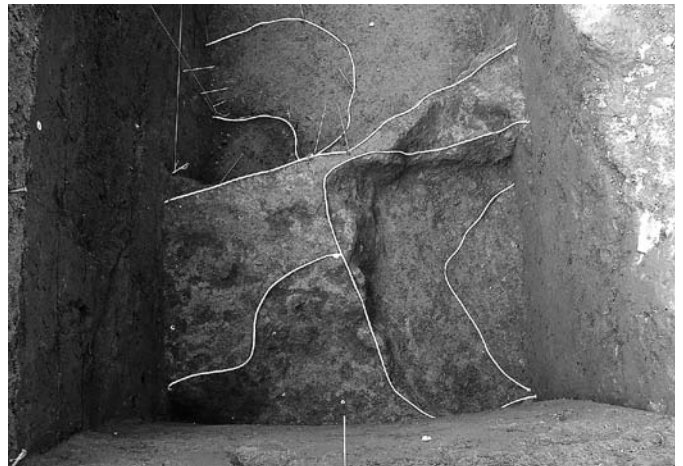
市原城跡 SB01 北東から



市原城跡 2トレンチ 東から



市原城跡 SB02・SB04(手前) 北から



市原城跡 SB01(上)・SB03(右) 東から



郡本14次 5



郡本14次 10



郡本14次 22



郡本14次 6



郡本14次 17



郡本14次 23



郡本14次 7



郡本14次 19



海士遺跡群 SI01-2



郡本14次 9



郡本14次 21



海士遺跡群 SI01-4



海士遺跡群 SI01-7



海士遺跡群 SI01-7



海士遺跡群 SI01-8



海士遺跡群 SI01-10



海士遺跡群 SI01-11



海士遺跡群 SI01-14



海士遺跡群 SI02-16



海士遺跡群 SI02-17



海士遺跡群 SI02-20



海士遺跡群 SI02-21



海士遺跡群 SI02-22



海士遺跡群 SI02-24



海士遺跡群 SI02-28



海士遺跡群 3ト6



山新第6地点 4



海士遺跡群 SI01-15



海士遺跡群 SI01-15



山新第7地点 1

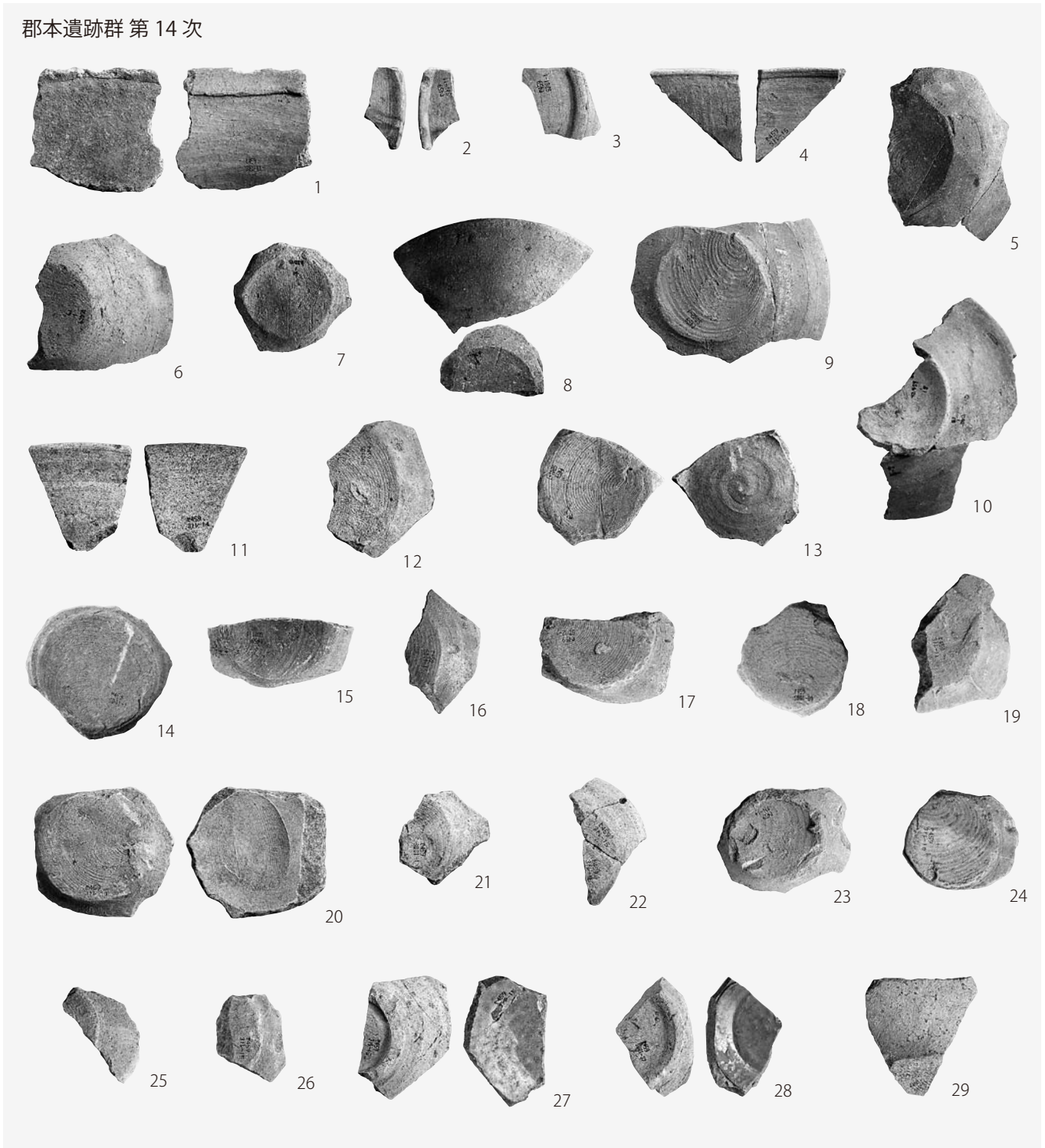


山新第7地点 鉄滓

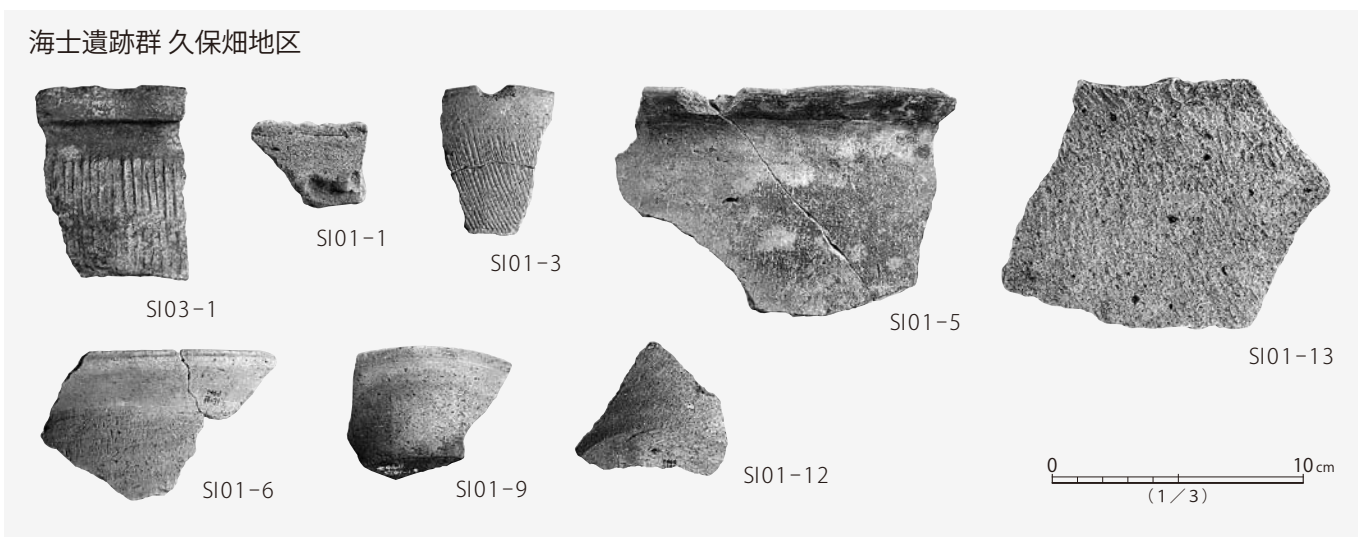


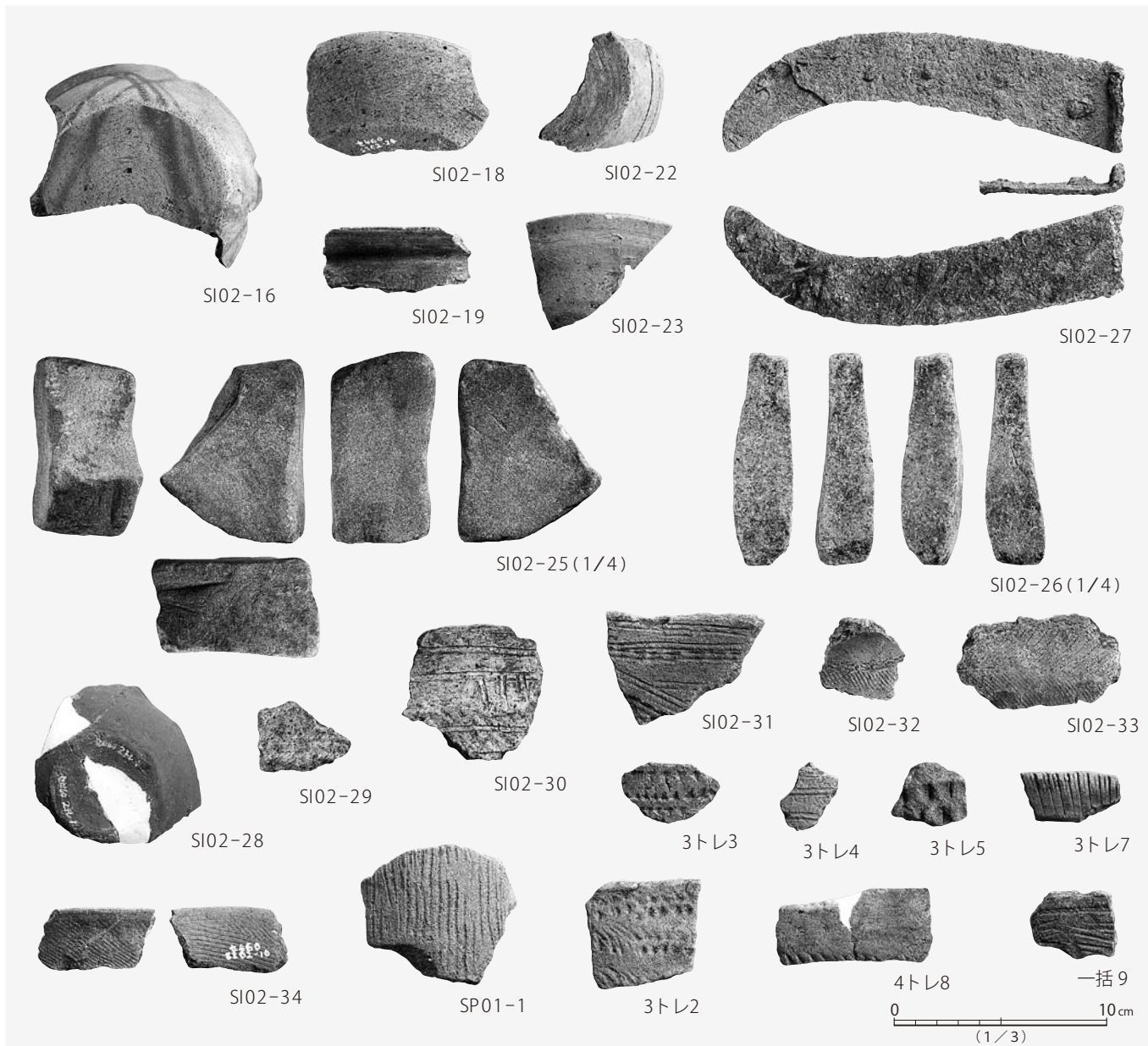
白船8次 2

郡本遺跡群 第14次

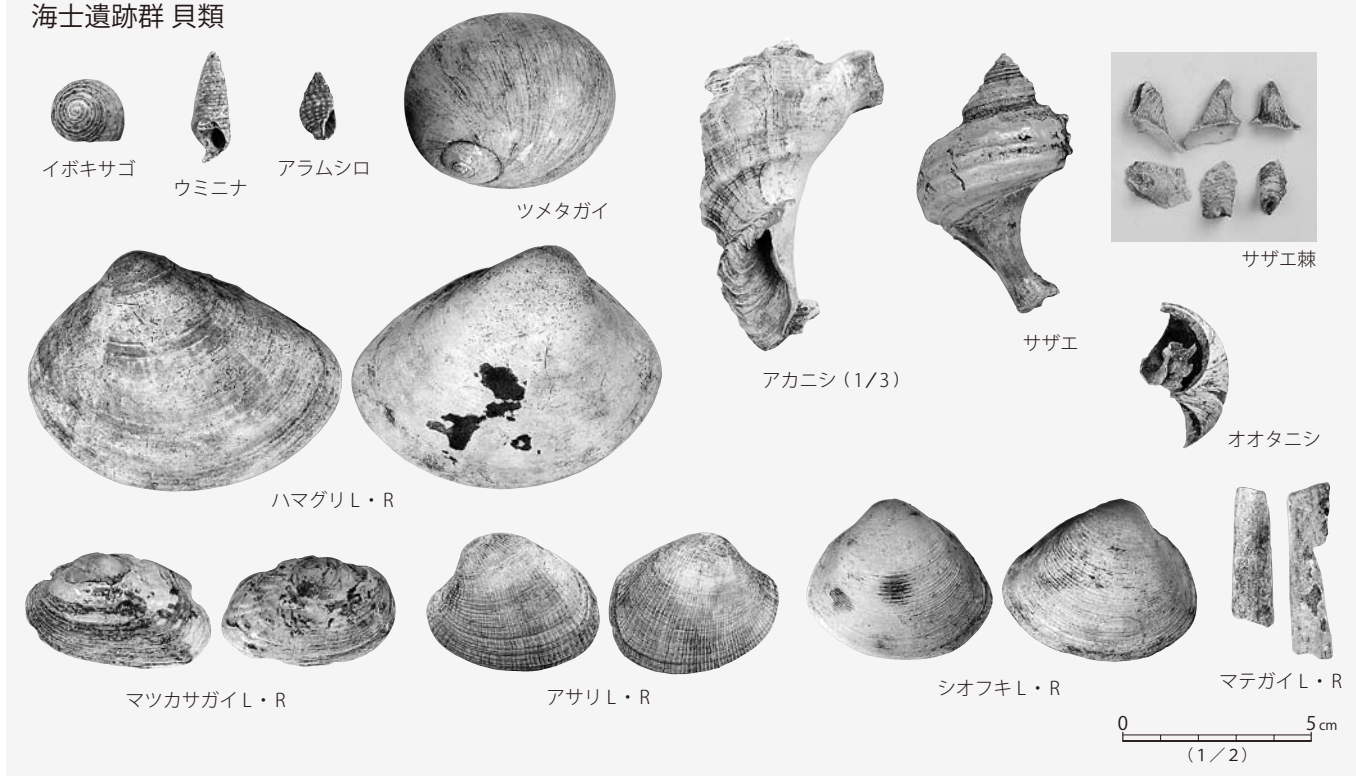


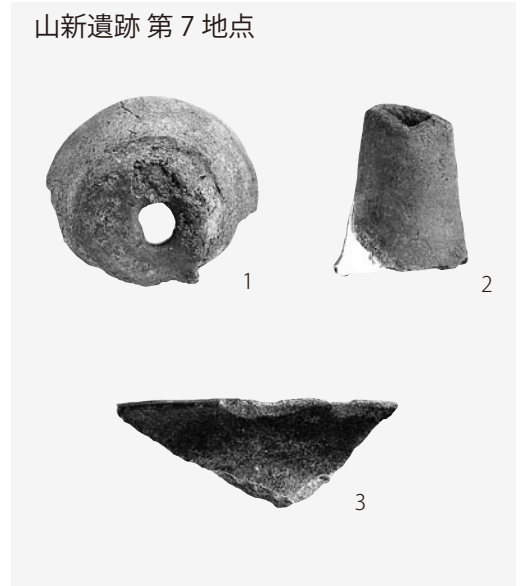
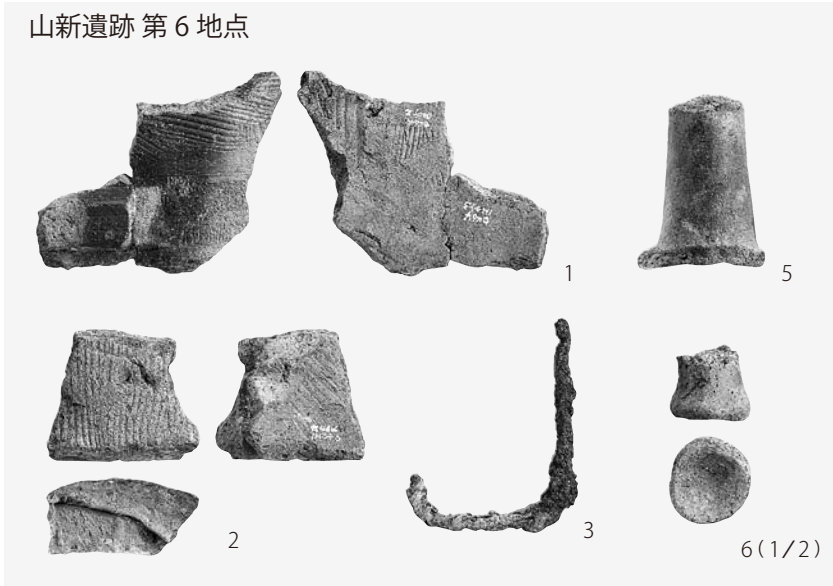
海士遺跡群 久保畑地区





海士遺跡群 貝類





海土遺跡群 SI01-15

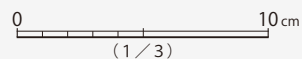
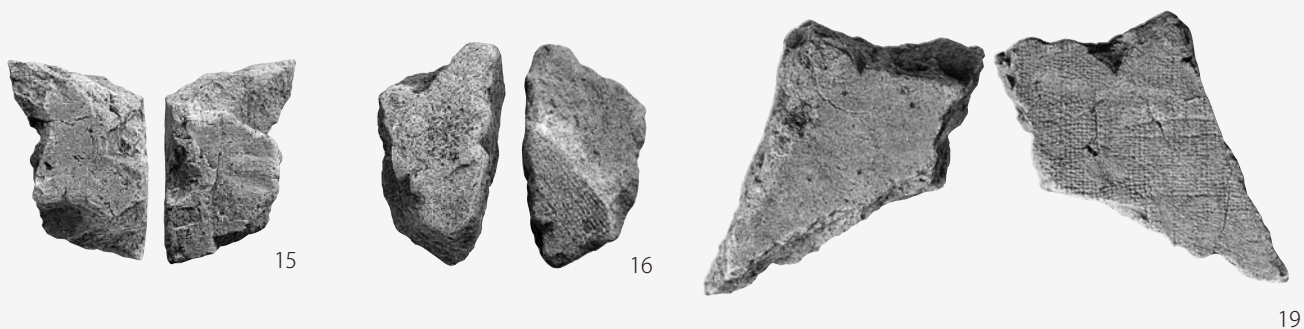
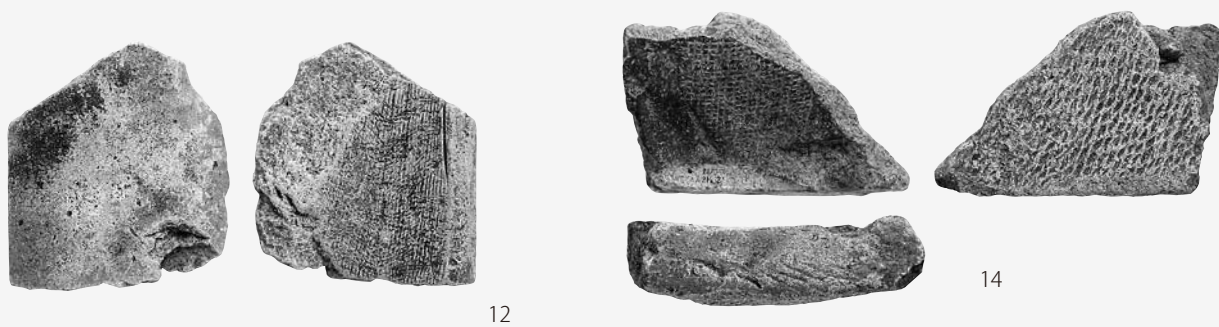
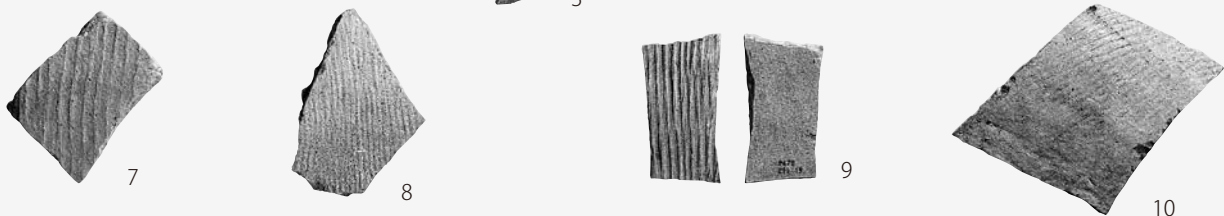
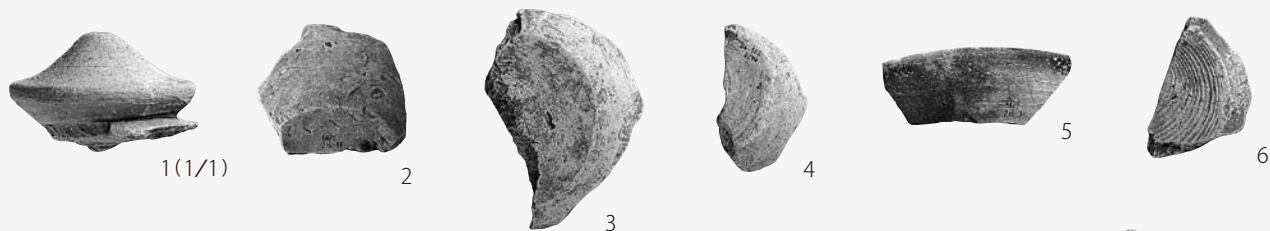


山新遺跡第6地点 1



山新遺跡第7地点 1

市原城跡 辻地区



(1/3)

報告書抄録

ふりがな	へいせい22ねんどいちはらしないいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	平成22年度市原市内遺跡発掘調査報告							
副書名	郡本遺跡群第14次・海土遺跡群久保畑地区・山新遺跡第6地点・山新遺跡第7地点・菊間遺跡群宮ノ腰地区・白船城跡第8次・市原城跡辻地区							
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	田所 真・田中清美・忍澤成視・牧野光隆							
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436 (41) 9000							
発行年月日	2011年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こおりもといせきぐん 郡本遺跡群 第14次	いちはらしこおりもと ちやうめ 市原市郡本1丁目 162-7	12219	セ459	35° 30' 44"	140° 07' 18"	20100208 ～ 20100226	23.7㎡/237.43㎡ 確認調査 112㎡本調査	個人住宅建設
あま いせきぐん 海土遺跡群 久保畑地区	いちはらし あまありき 市原市海土有木 1312-1	12219	セ460	35° 28' 39"	140° 07' 43"	20100419 ～ 20100513	23㎡/225.54㎡ 確認調査 32㎡本調査	農業用建物 建設
さんしん いせき 山新遺跡 第6地点	いちはらし あねさきあざどう うち 市原市姉崎字堂ノ内 1571-2	12219	セ464	35° 28' 51"	140° 03' 12"	20100823 ～ 20100825	14.8㎡/148.04㎡ 確認調査 2㎡ 本調査	個人住宅建設
きく まいせきぐん 菊間遺跡群 宮ノ腰地区	いちはらし きくまあざみや こし 市原市菊間字宮ノ腰 2480-3	12219	セ467	35° 31' 59"	140° 08' 26"	20100922 ～ 20100930	25.7㎡/257.63㎡ 確認調査 7㎡ 本調査	個人住宅建設
さんしん いせき 山新遺跡 第7地点	いちはらし あねさきあざどう うち 市原市姉崎字堂ノ内 1574-5	12219	セ465	35° 28' 53"	140° 03' 14"	20101006 ～ 20101008	27㎡/264㎡ 確認調査 3㎡ 本調査	個人住宅建設
しらふねじょうあと 白船城跡 第8次	いちはらし やまき あざさとしらふね 市原市山木字外白船 1277・1284の各一部	12219	セ466	35° 31' 29"	140° 07' 42"	20101012 ～ 20101015	54㎡/536.37㎡ 確認調査	住宅用倉庫 建設
いちはらしじょうあと 市原城跡 辻地区 辻地区	いちはらし いちはらあざつじ 市原市市原字辻14-3	12219	セ470	35° 31' 10"	140° 07' 33"	20101108 ～ 20101115	17㎡/165㎡ 確認調査	個人住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
郡本遺跡群第14次	包蔵地	弥生・古墳・奈良・平安	溝跡2条、竪穴建物跡1軒	弥生土器、土師器、須恵器、カワラケ、中世陶磁器		昨年度調査と続く中世期の大型V字溝跡を確認した。		
海土遺跡群久保畑地区	包蔵地	奈良・平安	竪穴建物跡3軒、土坑4基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器		奈良時代の竪穴建物跡と貝層を伴う平安時代の竪穴建物跡が重複して検出された。		
山新遺跡第6地点	包蔵地	古墳・近世	古墳周溝1条・近世溝跡1条	土師器、ハニワ、近世陶磁器		古墳時代中期とみられる古墳の周溝を確認した。		
菊間遺跡群宮ノ腰地区	包蔵地	中世	斜面貝層	土師器、近世陶磁器		中世とみられる貝層を検出した。		
山新遺跡第7地点	包蔵地	古墳・近世	古墳周溝1条・竪穴建物跡2軒	土師器、鉄滓		古墳時代前期の鍛冶の痕跡を確認した。		
白船城跡第8次	城跡・包蔵地	古墳・近世	竪穴建物跡7軒	土師器		古墳時代後期の集落跡を検出した。		
市原城跡辻地区	城跡・包蔵地	奈良・平安・中世	掘立柱建物跡6棟	土師器、須恵器、鉄釘、瓦、甕		奈良・平安時代の大型柱穴を確認した。		

要 約	<p>今年度は5遺跡6地点を調査し、昨年度調査の郡本遺跡群第14次を合わせて整理報告した。</p> <p>郡本遺跡群では、去年に続き大規模な中世のV字状溝跡を確認し、その方向や性格などを考察した。海士遺跡群では貝層を伴う竪穴建物跡を検出し分析した結果、淡水貝が多く含まれるなど、縄文時代の貝層とは異なる特徴をみた。また、隣接する8世紀中葉の竪穴建物跡では、鎌と砥石が出土し、国分寺建立期の一般集落の様子がみられた。</p> <p>山新遺跡の調査では新たに古墳2基を確認した。また、新知見として二子塚古墳の築造時期よりも早い前期段階の集落と小鍛冶痕跡を確認したことの意義は大きい。菊間遺跡群では貝層を確認した。遺物が少なく時期は不明確であったが中世のものと思われる。白船城跡では主郭推定部分を調査したが、大きく削平を受けていたことが残念であった。ただ、7次にわたる今までの調査で未確認の時期である、古墳時代後期の集落跡を確認した。</p> <p>市原城跡の調査では、市内最大級の大型掘り形をもつ柱穴跡を確認し、数時期にわたって大型建物が存在したことが明らかとなった。光善寺廃寺跡や国府推定地を有する市原エリアである当該地の重要性を、さらに裏付ける事例となった。</p>
-----	---

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第19集
平成22年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成23年 3月25日発行

編 集 市原市埋蔵文化財調査センター
市原市能満1489

発 行 千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1丁目10番6号